
ひとひらの夢

小日向ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとひらの夢

【Zコード】

N5122M

【作者名】

小日向ひなた

【あらすじ】

恋人もいないまま年齢を重ねて来た主人公、若菜。

ある日疲れ切った体で電車に揺られると、かつての恋人から声を掛けられる。それは、まるで運命の赤い糸が引き寄せた奇蹟のように・・・。彼は、昔とはまるで違う紳士的な男性へと変貌を遂げていた。若菜の心に恋の炎が燃え上がる。

時を経て再会した二人の恋の行方は・・・?

プロローグ（前書き）

時を経て、かつての恋人に出会い、そこから新たな恋が始まる。

プロローグ

乗りなれた電車。

疲れきった人達。

内藤若菜は、大きなバックを肩から下げ、車窓を眺めていた。外は暗く、窓に写るのは車内の風景だ。

誰もが疲れ、一日の仕事を終えた安堵感と倦怠感を宿しているよう見える。

ある者はケイタイを操り。
ある者は目を閉じている。
ため息が出る。

(今日も収穫なしか・・・・)

保険の外交員をしている若菜は、ここのどこの新規の契約が取れず、気分が落ち込み気味なのだ。毎日毎日、あちこちへと足を運ぶが、そう簡単に新規で契約が取れるものではない。分かってはいても、新規が取れない日が続くと、疲れが余計にのしかかってくる。(参ったな・・・・)

考える事は、どうしても仕事の事ばかりだ。

疲れた顔を見たくは無いと思いながらも、窓へと目が行く。

そこに居るのは、見た目は綺麗だが、年齢を隠せない、疲れ切つた自分がいる。

(ああ、嫌だ・・・・毎日毎日電話一本で呼び出されて、大した用事でも無いのに。いつから行けば、つるさがられるし。向いてないのかなあ)

ついついマイナスな考えが頭をもたげる。

こんな時は、誰かとアルコールで憂さを晴らすのが一番だが、残念ながら誘う相手がない。

若菜位の年齢になれば、誰もが結婚して子供がいる。

家庭を放り出して、一緒に遊んでくれるような奇特な人間はいないのだ。

唯一いるにはいるが、今日は彼氏とデートと言っていた。

(いいよね、彼氏かあ。私なんて恋人居ない歴・・・・・)

(数えたくも無い)

又、ため息が出る。

(しようがないな、コンビニでお酒でも買って帰らうかな)
そんな事をぼんやりと考えていた時、背後から声がした。

「若菜・・・・・じゃないか?」

自分の名前を呼び捨てにされて楽しい人はいない。

若菜も同様、眉間にシワを寄せて振り返った。

そこに居たのは、見覚えがありそうな顔だが、記憶が遙か遠く、思い出そうにも思い出せない。

怪訝そうにしていると、相手が笑って近寄ってきた。

「若菜だろ? ! 忘れたのかよ、酷いなあ、昔の恋人を!」
と言つて、又笑う。

その笑顔に記憶が蘇つた。

そうだ、大学時代に付き合つていた山本浩一だ。

浩一は、スーツをスマートに着こなし、髪を綺麗に整え、白い歯を見せて笑っている。

疲れなど感じさせない清潔感の溢れた社年と言つ感じだ。

「浩・・・・・ー! ?」

昔が蘇る。

「そうだよー思い出した?」

「ええ・・・・でも、何で・・・・」

今まで一度も出会わずに、18年が過ぎていたのだ、今夜電車の中で再会するなど誰が思うだろう。

「ビックリだよなあ。始めは他人の空似かと思つたけど、好きだった人の顔は忘れるものじゃないよなあ」

「ちょっとー」

誰に恥じる事も無いと言いたげに笑う浩一に、若菜は驚きながらも周囲に目をやつた。

こんな事を言われて嬉しくない筈は無い、しかし公衆の面前で言われて有頂天になれる年齢でもないのだ。

「今仕事の帰りか？」

「そうよ」

一瞬忘れていた疲れが体に戻った気がした。

「毎日この電車なのか？」

「違うわ、今日はたまたま。浩一こそ」

「俺かあ？俺もたまたまだよ。これこそ、運命の赤い糸だなー。」

「ちょっと！」

恥ずかしいが、嬉しい。

いくつになつても、男性から言わわれれば心が波立つ。

「結婚したのか？」

浩一の目が若菜の左手に注がれた。
しかし、若菜の指に結婚指輪は無い。あるのは、ファッションリングだけだ。

「していないよ」

「どうか、俺もだよ」

嬉しそうに浩一が若菜を見た。

電車が駅へと滑り込む。

疲れ切つた人たちが、重い足取りで電車を降り、乗つてくる。
決して混む時間ではない。

「どこに住んでるんだ？近いの？」

「そうね、ここから30分位かな。そつちは？」

「似た様なもんだね。それで、大学を出て家に帰らず就職したのか
？」

「そうだ。」

地方から都内の大学へ入学して浩一と恋に落ちた。

だが、その恋は若過ぎた。季節が幾つ変わったのか覚えていない

が、ある日突然幕が引かれたのだ。もつ、どちらから先に幕を引いたのかすら覚えていない程昔の話だ。

そして卒業と共に就職した。

最初は都内のレンタルを主に扱う企業だった。しかし、何年かすると周囲が結婚し、20歳も後半になれば会社に居辛くなつた。

とうとう自分にはもっと向いてる仕事がある筈だと、退職したのだ。

だが、現実はそんなに甘くは無かつた。

それから職を転々とし、現在の仕事に辿り着いたのだ。

生命保険の外交員。

人から有り難がられるのは、余程相手が困った状況になつた時で、常は煙たがられる。

何度辞めようと思つたかしれない。

しかし、35歳になつて入つた会社だ。これ以上仕事を変える事もはばかられ、結局続けているのが実情だった。

「浩一は何やつてるの？」

「サラリーマンだよ。別名営業マン」

「なるほどね。昔から、口が上手かつたものね」

「参るなあ、口が上手いなんて言わると」

困つた顔をしながらも楽しそうに笑つて見せる。

（昔と随分違うな）

学生の頃は、気に障る様な事を言わると、すぐにむきになつたものだ。

（そりや、お互い重ねてきたものがあるといつ事か）

若菜が、ふつと笑つた。

「何が可笑しいの？」

「お互い変わつたなつて思つたのよ」

「さうか？俺は、確かにおじさんになつたけど、若菜は昔のままだよ

嘘でも嬉しかった。

(口が上手いのは変わらないか・・・・)

「若菜、これからどうすんだ?」

「・・・・・・・・」

どうするのかと聞かれて、寂しく帰りますところの気も気が引けた。

とはいって、嘘を言つたといふで仕方が無い。

答えあぐねてると、浩一が言葉を繋いだ。

「せっかく会つたんだから、食事でもしないか?」

「食事・・・・・?」

「ああ、俺ずっと若菜と会つたかったんだよ。せっかく会えたのに、このまま別れたくないんだ」

真っ直ぐに若菜を見つめる浩一。

若菜の心に、忘れ去られていたやがわめきが起つた瞬間だった。

プロローグ（後書き）

長らく鳴りを潜めておりましたが、新たな分野で再度投稿いたしました。

大人になった二人が、これからどのような恋を展開していくのか、ご期待ください。

ブログランディングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお

願いします

第一話 ときめき

電車を降り改札口を出ると南風が気持ち良かつた。
さつきまで疲れ切つて風の暖かさを感じる余裕さえなかつたとい
うのに。

若菜は浩一と肩を並べながら、若かった頃を思い出していた。
あの頃の浩一は、若菜よりほんの少し背が高かつた。
洗いざらしたTシャツにGパン姿で、良く笑い、良く怒っていた。
お互いに愛し合つていた筈だった。

何度も肌を重ねた。

「」の愛が永遠に続くと思つていた。

「」でいいかな、今日のところは

浩一が止まつて見上げている店は、洒落た感じのレストランだつ
た。

しかし、決して腰が引けるよつなお高く留まつた感じではなく、
どちらかと言えば温かみのある店構えだ。

「いいけど、ここ知つてあるお店なの？」

「2回くらい来たかな。その程度だよ」

「そうなんだ・・・。」

「どうしたの？」

「ううん、私もあちこち出かけるけど、」のお店は始めてだから
「そりやあ、良かった。ここのお料理はなかなか上手いんだよ」

そう言いながら、店内へと足を踏み入れる。

奥から、落ち着いた感じの男性が出てきて、席へと案内してくれ
る。

お高く留まつた感じが無いにしても、席への案内役が居るような
店は、若菜にとつては久しい体験だ。いくら外回りと言つても、結
局は保険外交員だ。

食事に誘われた所で、精々ファミレス位なものなのだ。

又、誘われるよりお密様をファミレスへお連れするという方が多い。

家では話がし辛いからという密は、どうしてもファミレスになってしまうのだ。

席に着くと、ゆっくりと店内を見回した。

落ち着いた雰囲気と、優しい色調、優しい音楽が邪魔にならない程度に流れている。

時間帯のせいか、お密の姿も少ない。

しかし、空いているテーブルも綺麗にセットされ、いつでも次の客を迎える準備が整えられている。

ウエイターがメニューを持って、テーブルにやってきた。

「何がいいかな。若菜、何を食べる?」

「そうね・・・・

メニューに目を向けるが、何を注文してよいのやら、全く分からぬ。

文字ばかりのメニュー。

若菜の脳裏に浮かぶのは、ファミレスの目で見て分かるメニューだ。

(ファミレスの方が分かり易くていいわね)

「浩に任せるわ」

「よし!嫌いな物は無かつたよな」

「ええ」

浩一がチラッとメニューに目をやり、ウエイターに向かつて言った言葉は。

「コースで」

と一言だった。

ウエイターが「はい」と答えお辞儀をして戻つて行く。

「何がいいか分からない時は、コースにするのが一番なのさ」と、若菜にワインクして見せた。

悪戯っぽい仕草だが、男の色気を感じさせる仕草でもある。

「俺、ここに好きな女ひとを連れてきたかったんだよ」

真つ直ぐに若菜を見据えて浩一が言つた。

まるで、若菜を連れてきたかったと言われている様で、ドキッとする言葉だ。

「そ・その。残念ね、好きな人じゃなくて」

「そつか?俺は念願を果たせたと、今幸せを感じてる所なんだがね」

「え・・・・」

ときめきが戻つてくる。

昔のときめき。

「俺が結婚せずに、こんな歳まで独身なのって、どうしてだと思つ？」

「ああ?」

「若菜が・・・忘れられなかつたんだよ」

真つ直ぐに、若菜を見つめて浩一が穏やかに言葉を放つ。
大学を卒業して18年。

毎日、仕事に追われ生活するのがやつて、恋愛どころではなかつた。

告白された事はある。

付き合つた事もある。

しかし、どうしても最後の踏ん切りがつかなかつたのだ。
それがどうしてなのか、ずっと若菜には分からなかつた。
若い頃は、あんなに燃えるよつな恋をした。

溶けてしまうのではないかと思うほど、激しく重なりあつた。

それが、歳を重ねるに従いそんな感情が薄らぎ、好きだと言われてもときめかなくなつた。

それなのに、今浩一に真つ直ぐに見つめられると、どうしたことが心が波立つ。

胸が苦しくなる。

待つていたのだろうか。

ある筈の無い、偶然を・・・。

「若菜が結婚してなくて、良かつた」

「・・・・・・」

「やり直さないか？ 若い頃には戻れないが、もう一度やり直したいんだ」

「・・・・・・」

言葉が出てこない。

嬉しいのに、躊躇う気持ちがあるのか、言葉が出て来ないのだ。

ウエイターが料理を運んできた。

それは、温かそうに湯気が立っていた。

第一話 じめのわ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

昔の恋人との再会。凍つた心を溶かすような温かく甘い言葉。
貴女ならこんな時、どうするでしょうか。

プログラミングに参加しています。

面白こと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一話 再び

食事の間、浩一は面白楽しい話ばかりを若菜に披露した。

笑い過ぎて、食事が出来ない程だった。

こんなに楽しいのは久しぶりだと思った。

この時間が終わらないで欲しい。

「さすが、営業マンね」

「そうかなあ」

「営業マンはトークが大事だって聞いたわよ」

「そうかあ、そうかもしれないね」

あれだけ、真っ直ぐに若菜を見て、もう一度やり直したいと言つた浩一だったが、あれから一言もそれらしい話はしなかつた。

（あれは何だったの？）

（冗談？）

（浩一、もう一度言つて…）

しかし、その店を出るまで浩一の口から、一度と若菜がともあくへ言葉は出ては来なかつた。

浩一が時計に目を落とす。

「ああ、もうこんな時間か。ちょっと食事と思つただけなのに、悪

かつたね」

若菜が時計に目を向けると、10時を過ぎていた。

「そうね、あつと言つ間だつたわ。楽しかつた」

「そう思つかい？」

「ええ、とても楽しかつたわ」

浩一は満足そうに笑つた。

店を出ると、さすがに風が冷たく感じる。

春とはいえ、夜の風は冷たい。

又、駅へと肩を並べて歩く。

駅が近づくに従い、酔っぱらいの姿が目立つ。

程ほどに飲んで、気分良くなっている者。

泥酔して、路上に座り込んでいる者。

いつもなら眉をしかめて見る光景も、今日の若菜には氣にならなかつた。

(さつきの言葉が「冗談でも、ちょっとときめきを感じられたんだから、儲けものかな)

そんな事を考えていた時だつた。

「さつきの返事聞いてないけど」

浩一が唐突に切り出した。

「何が？」

浩一が立ち止まり若菜を見つめる。

「もう一度・・・もう一度やり直したいんだ」

真剣だつた。

真つ直ぐに若菜を見つめる浩一の瞳が、熱く語り掛けている。
「ずっと、忘れられなかつたんだ。だから、俺、お前以外の女とは結婚したくなくて、ここまで來たんだ。頼むよ、もう一度やり直してくれ」

「でも・・・」

何であの時別れたのだろう。

若菜の心がアルバムをめくる。

「あの時、お前にふられて、俺はどれ程ショックだつたか

「え・・・違うわ。ふつたのは浩一の方よ」

二人のアルバムがめぐり続けられる。

しかし、めくられるページにあるのは、愛し合つた頃の楽しい思い出ばかりだ。

どうして別れたのか、その悲しみのページだけが見つからない。

「多分、浩一が先に言い出したのよ」

「多分つて・・・・・」

浩一の肩が大きく揺れ、可笑しくて仕方が無い様に笑つた。

「覚えてないのか？」

「…………そうね…………はつきりとは」

「お前が俺に愛想を尽かしたんだよ。それで、勝手に怒つて出て行つたんじやないか」

「そうだったのだろうか。

思い出せない。

では、何故愛想を尽かしたのだらう。

「俺は、お前を失つてから自暴自棄だつたよ

「…………」

「一度と恋愛なんてしないと決めたんだ

「…………」

「それが今日再会できた。それも若菜はまだ未婚だ。誰のものでもないって言つじやないか。これは運命以外の何者でもないと思わな

いか？」「

「…………」

「嫌いか？今でも俺が憎いか？」

昔の浩一は、いつでも夢を追い駆けて熱く語つていた。

将来は何になりたいか。

自分はどんな人生を送るのか。

「俺には、お前しかいないんだ」

楽しかった、大学時代。

「若菜に会えた今夜を後悔したくない

(そりや。私も浩一に会えて嬉しかった)

「俺は、もう昔の俺じゃないんだ。40歳のオヤジだよ。それだけ苦労もしてきた。あの頃みたいに若菜を哀しませる事なんてしないから」

(哀しませる…………?)

「愛してるんだ。ずっと、愛してたんだよ」

別れのページが開いた。

そうだ、あの時別れたのはお互い辛い選択だった。

浩一が借金をして、若菜が返済のために働いた。

借金の額が大きかつたために、夜の仕事をするしかなかつた。

それでも浩一は気にしていない様子だつた。

それが、若菜を激怒させたのだ。

そして、間もなく別れを切り出した。

愛想が尽きた。

それが最後の言葉だつた。

「今は眞面目に働いてる。若菜を哀しませる事なんてしない」

(そうね、お互ひ苦労を重ねたものね)

「もう一度だけ、俺にチャンスをくれ」

車のライトが一人を照らして通り過ぎた。

(もう一度、もう一度だけ・・・・・。私も貴方を愛してた。きっと、ずっと愛し続けてきたのかもしれない)

若菜の心が波立つ。

熱い想いが湧き上がる。

若菜の唇が動いた。

「待っていたわ、浩一」

小さな咳きを、浩一は聞き逃さなかつた。

春風が一人を優しく包み込んだ。

第一話 再び（後書き）

お読み頂ありがとうございました。
どんな気持ちが浩一くと向いていく若菜ですが、どんな恋愛が待
つているのか・・・。

ブログランディングに参加しています。

面白こと思われた方は（ ^ ^ ）【ポチッ】とお
願いします

第二話 弹む心

マンションに帰ると、いつもなら寒々とした部屋に明かりを点け、ため息混じりにTVを点けるのだが、その日の若菜は違っていた。心が躍る、笑つつもりが無くても頬が緩む。知らず知らずに鼻歌が出る。

朝の食器を洗うのも、苦にならない。

風呂に湯を張り、入浴の準備も面倒ではない。要するに、何をするのも楽しいのだ。

体が軽く、心が弾む。

これが恋。

久しく忘れていた感情。

何もかもが輝いて見える。

これから何が起こるのか、楽しくて仕方が無いといった感じだ。ゆっくりと湯に漬かり、考えるのは浩一の事ばかりだ。

『もう一度やり直さないか』

『愛してるんだ』

『もう一度だけ、俺にチャンスをくれ』

『若菜が結婚してなくて、良かつた』

思い出し笑いがこぼれる。

「私も待っていたんだわ」

「ずっと誰に告白されても、この人じゃないって思ってきた」

「それは浩一と再会する為だったのね」

体中から、喜びが溢れ出る様な感覚。

「そうだ、次に会う日の約束をしなかった

「後で、メールしようかな」

「でも、いるさいと思われないかな」

「どうしよう・・・・・」

思わずキャーと叫びたくなるのを堪えて、風呂から出る。

化粧水と乳液をたっぷりと顔につけ、鏡に映す。

「あ・・・年齢には勝てないよな」

「そうだ、栄養クリームがあつたよね」

たっぷり栄養クリームを顔に塗りつけ、一晩で10歳若くなれと願いを込める乙女心。

そこに、ケイタイが鳴った。

「こんな時間に誰だろ?」

ケイタイを開くと、さつき別れたばかりの浩一からだつた。

「もしもし」

心なしか、いつもより声のトーンが上がる。

「若菜か?」

聞き覚えのある浩一の声だ。

「そうよ」

「さつき会つたばかりなのに、電話して」「めん

「つうん、大丈夫よ」

「次、いつ会えるかと思つてね。デートの約束をしなかつたのを思い出したんだよ」

「あら」

同じ事を考えていたのかと可笑しくなつた。

「そんなに笑うなよ。昔の恋人とはいえ、恥ずかしいだろ?。自分でも、さつき会つたばかりでこんな電話、子供みたいだと思つけど、会いたいんだよ」

「そうじゃないわ。私も同じことを考えていたからよ」

素直に言えた、自分の気持ち。

浩一の気持ちを受け入れるまでは、小さな引っ掛けがあつたが、浩一を受け入れた今、何も躊躇つものは無いのだ。

一挙に、若かったあの頃に戻つてしまつた様な錯覚に捕らわれていた。

「本当か?!嬉しいなあ

「私もよ、浩一」

「それで、いつ会えるかな

「そうね、仕事が空くのが・・・田曜になるわ

「日曜か。まだ、3日もあるのかあ。夜は会えないの?」

「時間が決められない仕事だから、浩一は大丈夫なの?」

「若菜に会う為なら、都合を付けるよ。さすがに、この歳になつて

都合が付けられない平社員じゃないからね」

「あら、そんなに偉いの?」

「そんなにって程でもないが・・・」

「役職あるの?」

「う・・・ん。まあね、あんまりプライベートで役職は言いたくな

いけど、若菜に信じてもらう為には仕方ないかな」

「そうね。聞きたいわ、浩一がどこまで頑張ったか」

「営業所の所長だよ」

「え! 所長なの?」

「そうだよ」

「あの浩一が・・・信じられないわ」

「ずっと、あの頃の俺じゃないよ。参みんな

浩一の困った顔が目に浮かぶ。

それと同時に、浩一が本当に頑張ってきたのだと嬉しく思えたのだ。

学生時代の浩一からほ、想像もできない。

熱く政治を語り、役者になりたいと夢を見ていた、あの頃の青年

が、今では営業所の所長だとは、誰が信じられるだろう。

「だから、若菜には辛い思いをさせないって言い切れるんだよ

優しい声。

思いやりの籠った言葉。

胸が高鳴る。

体が熱くなるのが分かる。

「俺は時間のやりくりは出来るけど、若菜はお客様がいるからな、日

曜まで待つよ

「ええ、『Jめんね』

「いいさ、楽しみは先の方がいい」

「日曜の何時にどこにする?」

時間と場所を決めるまでに、更に時間が掛かった。

ほんの少しの会話でも楽しくて仕方が無いのだ。

気が付けば、深夜1時を超えていた。

「あー寝なくちゃ。明日、早くにお得意様の所に行く事になつてるのでよ」

「大変だな。ごめんよ、遅くに」

「ううん、嬉しかったわ」

「お休み

「お休みなさい」

電話を切るのが躊躇われる。

このままずつと話していたかつたが、明日も仕事がある。

明日こそ、新規を獲得しなくては、プライドの問題もある。

どんどん若手が新規を挙げているというのに、ベテランの自分が新規を獲得できないとなれば、陰でどんな事を言われるかは想像がつく。

「早く寝て、明日に備えなくちゃ！」

若菜の部屋の明かりが消えた。

第三話 弾む心（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（^-^）【ポチッ】とお願いします

第四話 客

翌日は早くから客先へと急いだが、結局用件は大したものではなかつた。

一縷の望みを掛けて出かけて行つたのだが、そんな甘い話がある筈も無い。

(小説なら、この辺りで新規獲得なんて筋書きもあるんだろうな。)

客に笑顔を向けながらも、ぼやきが入る。

「悪いわね、せっかく来てくれたのに、当の本人がいないんじゃ話にならないわよね」

こここの客は、小さな会社を経営しているが、ここ数年不景気でしょ
うがないともらしていた。

この手の客に、新規の相談をされると思う方が、可笑しいのかも
しれない。

が、それでも希望を捨てられない事情があるのだ。

若菜は、作り笑いを浮かべながら、社長婦人の話し相手をしてい
た。

「あの人気がね、保険を見直そつて言ってたんだけど

「見直しですか？」

「そう、不景氣じゃない。うちも苦しくてね、保険が高いから、何
とか削減できないかって」

「保障を小さなものになさるんですか？」

「さあ？うちの人人がどう考えているのか、分からぬのよ

「はあ・・・・」

「それなのに、呼んでおいでになくなっちゃうんだから、本当に分
からないわ」

社長婦人のため息が、重苦しさを増幅させる。

保険の削減と聞けば、笑顔で相談に乗らねばならないが、内心は

「冗談じゃないと言いたい。

それでも、止められるよりはました。

「うちの元受が事業を縮小したとかって、この間言つてたのよね」

「大変ですね」

「そうなの、そうなるとどうしたつてうちの仕事も減らされるわ。現に、仕事が減つてるんだから」

完全に愚痴に入っている。

「これ以上減らされたら、どうやつて社員に給料を払つたらいいのか・・・悩んじゃうじゃない」

「そうですね」

「金作にも走つてゐみたいだけね」

「社長さんですか？」

「そうよお。よく分からんんだけどね」

そう言いながら、社長婦人の指には、大きなダイヤが光り輝いているのだ。

本当に、この婦人は現状を把握しているのかと訝しく思つてしまふ。

(ただの愚痴なら、時間の無駄だわ)

笑顔の下で、帰るタイミングを見計らつてゐるのだが、なかなかそのタイミングが掴めない。

上手い外交員になると、簡単にタイミングを掴んで、次の仕事へと繋いでいく所だが、若菜にはそんな芸当ができるないので。

「でね、内藤さんつて独身だったわよね」

「え、あ。はい」

「いい人がいるのよ。50歳で、奥さんと死に別れたそなだけど、お子さんも大きくなつて、再婚相手を探してゐるつて言つのよ。本当にいい人なんだけど、どうかと思つて」

そういうて立ち上がると、何やら封筒を持つてくる。

(本心はこれか!)

いつの世にも、人の世話を焼きたがる人はいるものだ。

本当に保障の縮小の話だったのかなど、疑いたくもなるといつものだ。

さすがに、仕事だけに笑顔だが、心中では時間の無駄だと叫んでいるのだ。

「ああ、すいません。私、結婚は・・・」

「あら、お付き合いされてる方がいるの？」

疑いの眼差し。

今まで何度も、同じ田に出会ってきた。

30代の頃は、散々嫌な思いもしたし、はつきりと断る事が出来なかつた。

その為、付き合つ破田になり、結局断れば仕事に支障をきたす。公私を分けられない人が多いのだ。

だが若菜も40歳を迎え、さすがに肝が据わつてきている。

「ええ、いるんですよ、それが」

笑つてこの場をやり過ごし、さつさと退散しようと田論んでいたのだ。

(今日も空振りかあ)

心の中は土砂降りの雨だ。

婦人は、さも残念そうに写真を仕舞つたが、最後にこう付け加えるの忘れなかつた。

「又来て頂戴、保険を止めるから」

思わず「はあ？」と言葉が出たが、どうじょつもないのだった。

客先を後になると、無性に腹が立つてきた。

(どうして見合いを断つたからって、保険を止めることになるわけ？)

(それって、腹いせ？)

(どうして、ああいう人は公私をわきまえられないわけ！)
目頭が熱くなる。

じついう時つづくと思うのだ、自分には合わないのではないかと。

今日も同じだ。

自分には、この仕事は無理なのだ。

次の客先へと足を向けながらも、辞めたいと繰り返す心の叫び。さすがに最近は無くなつたが、30代の頃は体目当ての男性客も多かつた。

特に、社長と名の付く中小企業だ。

全部とは言わないが、若菜に声を掛けてきたのはその手の類ばかりだった。

断れば切られる。

セクハラだと叫んでも、所詮は外交員だ。誰が助けてくれるわけでもない。

同僚の中には、新規を取る為なら手段を選ばないといふ者もいる。しかし、若菜にはそれが出来ない。

小さなプライド。

それが、最近はめつきり無くなつた。

(それも悲しい現実よね)

以前は痴漢に遭つていたのに、年齢と共に痴漢も寄り付かなくなつたと、ぼやく年配の同僚がいるが、正にそれと同じではないか。ため息が出る。

仕事もダメ。

女としての魅力も無い。

はつきりそう言われているような錯覚に襲われる。

(やっぱり合わないのかな、この仕事・・・・)

(ああ・・・・辛いよ・・・・)

しかし、泣きたくても涙が出てこない。

ケイタイが鳴った。

バックからケイタイを取り出し、ディスプレーの文字を確認する。

同僚の遠藤未来だ。

(ああ、未来か)

通話ボタンを押す。

「もしもし」

街中の雑踏の中で、他人の邪魔にならないように身を避けながら歩く。

「この行動も慣れたものである。

「若菜？今どこ？」

「K町」

「近いね、お毎どうゆ

腕時計に目を向けると11時半を指している。

ほんの少し、密と話したつもりだったが、結局こんな時間になってしまっていたのだ。

「そうね、じゃあ、食べようか

気の合つた同僚同士、近くにいれば一緒に食事をして、情報交換をするのも単独行動の多い外交員の習慣だ。

「私、もう少しでK町に到着するから。駅前のファミレスで会う。

「分かった、先に行つて席をとつておくれわ

「了解。じゃ、後でね」

電話が切れた。

(ちょうど良かつたかも、あの元気印が一緒に落ちた気分も浮上できるかもね)

第四話 客（後書き）

お忙しい中、お読み頂きありがとうございます。
感想をいただけると作者の励みになりますので、よろしくお願いします。

プログラミングに参加しています。

面白こと思われた方は（ ^ ^ ）【ポチッ】とお
願いします

第五話 友達

先にファミレスに入り、窓際席に着く。
まずはドリンクバーを注文し、後は連れが来てからとこいつ事にする。

いつもと同じ。

先に来た者は飲み物だけで待つのだ。

勿論、午後のアポイント次第なのだが、それもこれも彼女達の中で自然と出来上がった暗黙のルールなのだろう。

窓から駅前の雑踏を眺める。

ラッシュでも無いのに、どうしてこいつも人が多いのかと不思議に思う。

その多くは子連れの主婦や年配者。

あるいは、スカートを短くした女子高生やルックスばかりを気にしている男子学生。

(学校の時間の筈だけな)

ぼんやりと眺めながら(今時の学生は……)と否定的な考えが浮かぶ。

これもやはり年のせいか?

それとも性格なのか?

若菜が育った頃は、学校がある筈の時間に駅前に学生が居るなどを考えられなかつたのだ。

授業に出ず、サボるというのは不良のする事と相場が決まつていた。

しかし最近の子は、サボっているから不良なのかといふと、そもそも無さそうだ。

不良という定義が変わつてきているのかもしねり。

そんな事をぼんやりと考えている所に、元気な声が聞こえてきた。

「待った?」「めんねえ」

田を声の方へ向けると、明るい色のスースを着こなした未来が立つていた。

明るい表情に、肩まで伸ばした艶やかな髪、薄化粧でありながら透明感を感じさせる肌。

男でなくとも惚れ惚れする。

それに比べて自分は・・・・と、いつも未来を見ると悲しくなつて来る。

「暗いよー。どうしたの?」

弾む笑顔で問いかけてくるが、若菜にはその笑顔が辛い。

昨日はあんなに若くなれと願いを込めて、お肌の手入れをしたのに、今朝鏡に映つた自分の素顔は寝不足で目蓋の腫れたオバサンだ。（しようがないよ。未来は35歳、私は40歳。この差は大きいって）

自嘲気味に笑うしかない。

それでも浩一は愛していると言つてくれた。
変わらないと言つてくれたではないか。

（そうだ、私には浩一がいるじゃない！）

「ねえ、どうしたの?今日は、お得意さんに呼ばれたんだよね」
心配そうに、若菜の顔を覗き込んで来る。

「そうよ、呼ばれて行きましたよ」

「新規・・・・ダメだったんだ」

「見事にね。それどころか、最悪止められちゃつた」

「何で!?」

話が核心に触れようとした時、ウエイトレスがメニューを持ってきた。

暫らく話を中断し、田で見て分かるメニューに視線を落とす。いくら見た所で、注文する物はいつもと何等変わらないのだが。注文を終え、話を促したのは未来だった。

「で、何で?」

「それがさ・・・・・」

愚痴になるとは思いながらも、愚痴うなれば次の客の所で笑顔が出ない。

愚痴を言える相手がいる。

それが、こういう時の強みになる。

同じ仕事仲間でなくては、いくら話しても分かつてはもらえないが、未来は同僚だ。

更には、今の職場で一番仲が良いのだ。

どんな愚痴でも嫌な顔をせずに聞いてくれる、唯一信頼できる友達だ。

若菜は、さつき密の所で起こった事を、愚痴を交えて話した。

食事をしながら「ふーん」「そうなんだ」「ひどーい」と繰り返してくれる。

「あるよねえ、そういうの。自分の趣味で人の人生を書き回さないで欲しいわよ！」

未来も憤りを感じるとばかりに、愚痴が出る。

「私もこの間あつたよ。見合いどころか、息子の嫁について。冗談じやない、そいつ二ートだよ！」

ああ、あの話かと思つたが、この間聞いたよとは言えない。

未来は友達も多い様で、誰に話したか覚えていないのだろう。

「でさ、断つたらやつぱり切られちゃつた。うちの息子のどこが不満なんだって、奥さんが言うのよ。そりやあ、不満だらけだよって言つてやりたかったわ。二ートだよ、二ート！ 仕事しぐみつて思うじゃない。仕事してから、結婚考えろよ！ って」「そうねえ。仕事もせずに結婚つて言われてもね」

タベの浩一が思い出される。

スーツを着こなし、大人の男といった色気を漂わせていた。

仕事もバリバリとこなし、今では営業所の所長だ。

(浩一と結婚したら私、営業所所長夫人だ！)

思わず顔がほころぶ。

「何をにやけた顔してるのよー?」

「え? にやけてた?」

「さつきまで暗かったのに、今どきは「ヤーヤー」としゃべって。変だよ

確かに変かも知れない。

いや、確実に変だわ!」

浩一の事を思い出すと、顔が緩むのだ。

それは、どうしようも出来ない。

「うん・・・それがね・・・うふふ・・・」

「気持ち悪いなあ」

「もう言わないでよ。良い事があつたんだもん、しょうがないでしょ?」「う

「ええ、密先で嫌な事があつたのに、今度は良い事があつたって・・・」

怪訝そうな目を向けてくる。

密先での嫌な事も屈辱的ではあつたが、それ以上に浩一との事が幸せなのだ。

若菜は久しぶりの、この幸せな気分を未来に話したくなつた。

誰かに聞いて欲しい、そして思いつきり惚氣たいのだ。

「あのね、タベさ・・・・・」

食後のドリンクを飲みながら、タベの奇蹟のような出合話を聞いて聞かせた。

今まで、未来の恋愛話ばかり聞いてきたのだ、これ位は許されるだろうとこう想いがある。

そして、未来なら喜んでくれると思つていた。

「そうかあ!」

話し終えると、未来の顔が明るく輝いた。

「おめでとう! 今夜はお祝いをしよう! ! !」

「え? お祝いつて、まだどうなるか分からぬのよ」

「いいじゃない、前夜祭よ!」

「前夜祭つて、変じやない?」

「そりゃあ、じゃ取りあえず今夜は若菜の惚気を全部聞いてあげるから、どう？」

未来の手がお猪口を煽る手つきになる。

「いいね。飲もうか！」

「じゃあ、午後の仕事をやつつけて飲みに行こう！」

お互いの時間を調整しあい、いつもの店で落ち合つ約束をすると、

二人は別々の方向へと別れた。

さっきまで沈んでいた気分が、一挙に上がり晴れやかだ。

（よーし！新規獲得目指して、回るか！）

大きく手を空に突き上げて、自分に渴を入れて歩き出した。

第五話 友達（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。
続きは又。。。。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第六話 居酒屋

新規を獲得するためには、足を使うしかない。

とにかく歩き、ドアを叩くのだ。

その日は、いつになく元気にドアを叩く事が出来た。いつもなら、どうしてもドアの前で戸惑ってしまう。（又、断られるに決まっている）

そんな想いが込み上げて来るのだ。しかし、今日の若菜は違っていた。

住宅地に入り、チャイムを鳴らす。

家人が出てくれば笑顔でパンフレットを渡す。

興味のありそうな客だと思えば、踏み込んで話をすると。当たり前の営業スタイルだが、結構ストレスになる。こうした積み重ねが、顧客獲得へと繋がるのだ。

勿論、行動したその日に収穫がある筈も無く、今日は新規を獲得する事無く営業所に戻ったのだが、それでも若菜には大きな達成感が漲っていた。

早々に業務日報を書き、上司に提出する。

嫌味の一つも言いたそうな上司を尻目に、営業所を後にした。（いいんだ、やる事はやつた！）

（毎日続けていけば、必ず道は開ける！）

「上がりですかあ？」

20代後半の同僚が、営業所に戻つて来たのと出くわした。

「そう、今日は早かつたわ」

「こつちは、又呼び出しですよ。今夜8時に来てくれつて言われちゃいました。参りますよ」

「そう、大変ね」

「いいですねえ、内藤さんはそういう我慢な客がいなくて嫌味とも取れる言葉だが、今日の若菜は気にしなかった。

先輩らしく、堂々と返したのだ。

「そんな事無いわ。今日は呼び出されなかつただけよ。みんな同じだから、頑張つて」

そう言つと、余裕の笑みを浮かべてその場を後にした。
何と言われようと、思われようと、浩一をえこしてくれたら若菜は幸せなのだ。

今日のような嫌な客でも、浩一の事を思い出しやすれば、乗り越えられる。

（きっと、浩一と結婚して、誰もが羨むような結婚式を挙げて見せるわ）

早くも、若菜の心の中では、結婚への夢が膨らみ出していた。

いつもの居酒屋に入ったのは、7時近くだった。

まだ、客の姿もまばらで、居酒屋にしては寂しさを覚える。

それでも、程よい時間になれば店中が酔客の喧騒で、まともに話も出来なくなるのだが。

若菜も未来も又営業所の連中も、この店を良く使つていた。

それは、営業所から近く料金も良心的だといつ、一般市民に優しい居酒屋だからだ。

更に、女性が好む様なメニューが多いのだ。

未来よりも先に到着した若菜は、店の奥に座る事にした。
どういう訳か、人間といつのは隅が好きな様で、若菜もじつ多分に漏れず隅が好きだ。

出来る事なら壁にぴたりと体を付けて、寄り掛かりたくなる。
さすがに40歳の良識ある女性としては、そういうたらしない姿勢は出来ないのだが。

店員が、お絞りとメニューを持つてやつてきた。

「後で連れが来ますから、取りあえずビールと枝豆をお願いします」
若菜はいつも、同じ台詞を言つて、
連れがいる。

」の言葉が大事なのだ。

中年の女が一人で居酒屋に来て飲むのは侘し過ぎる。
しばらくすると、ビールと枝豆がテーブルに置かれた。
心の中で、今日の自分に乾杯しながらビールを口にする。
思わず「上手い！」と叫びたくなるのを、ぐつと堪えた。

ケイタイを握りながら、ビールを口にしていると未来が現れた。
「ごめんね、営業所に帰つたら、所長に捕まっちゃつてさ」

「何だつて？」

「大した事じゃないわ。愚痴みたいなものね。売り上げがどうのつ
て、右から左だから」
そう言って笑つた。

「未来は今月ノルマ達成してるんだよね」

「お陰様で、達成しました」

そういうと、店員を見つけて「ビールください」と叫んでい
る。

「どうらかと言えば、店員より声が大きい。

待つ事も無く、ビールが未来の前に置かれた。

一人で乾杯すると、一気に飲み干す。

「相変わらず良い飲みっぷりね」

「飲むのだけが楽しみですから」

そうは言うものの、未来にだつて彼氏がいるのだ。

それも、付き合つて5年にもなる。

そろそろ、結婚の話も出ているとも聞いている。

「さて、何を頼もうか」

未来がメニューに視線を落として、指で指す。

「これと、これと、これと、これ！で、ビーフヘ
いのやり方だ。」

つまりに関しては、未来の好きなものをチョイスする。

そして最後に「どう？」と聞いてくるのだ。

若菜は、未来のこのやり方が好きだ。

自分で頼もうとするど、あれも食べたいけど、これもいいなと迷つてしまつ。

未来のように、完結に「これにしようと決めてもらつた方が、面倒が無くて良いのだ。

「いいよ」

「じゃ、決まりね」

店員を大声で呼び、注文をする。

「それと、ビールね。一番最初に持つて来てよねえ」

店員が笑顔で、分かつてますと言いたげに頷いて踵を返した。厨房に向かつて、オーダーを伝えている声が聞こえてくる。

「で、次はいつ会うの？」

唐突な質問だが、それが浩一の事だという事は聞かなくとも分かる。

「今度の日曜日」

「へえ、2日後にはデートかあ」

ビールが未来の前に置かれる。

「私もビールお替わりね」

若菜も負けじと、ビールを注文する。

徐々に店の中が賑やかになってきた。

「それにしても、凄いよね。18年ぶりに出会うなんて、ドラマじやない」

「うふふ」

「気持ち悪いから」

「だつて」

「分かるけどね」

ビールと料理がテーブルに置かれ、若菜がビールに口をつける。テーブルの向こうに居るのが、未来ではなく浩一だったら。

そんな想いが湧いてくる。

未来には申し訳ないと思いながらも、消せない想い。

「その彼氏と出会いの為に、ずっと他の男を遠ざけていたなんて。事実は小説より奇なりって言うけど、本當だねえ」

「まさか、彼と再会する為に断つてきただ訳じゃないと思うんだけど」
「そうは言つても若菜自身、浩一との再会が全ての様な気がしてならない。

「いやいや、きっと彼との再会の為よ!」

そう言いながら、更にビールのお替りだ。

勿論、若菜も負けてはいない。

今まで何度も未来は若菜に、男友達を紹介して来ているのだ。

しかし何度紹介しても、誰を紹介しても若菜の意に染まる人はいなかつた。

どうして若菜は誰とも付き合おうとしないのか、不思議に思つていたのだが、これで納得が出来たと喜んでくれるのだつた。

徐々に店内の喧騒が大きくなり、一人もアルコールが回り出すと周囲をはばかる事を忘れ、声が大きくなる。

店員がビールを手に駆け回っている。

あちこちから話し声が聞こえ、大笑いが聞こえて来る。

酷いのになると、歌い出す者まで出て、店員からたしなめられるといった状況まで起こるのだ。

それでも誰もが楽しく語らい、日頃の鬱憤を晴らすべく騒ぐ。

若菜と未来も同様に酔いに任せていた。

若菜の大恋愛に、祝杯を挙げようと始まつた酒宴も、結局零時を回る頃には、お互ひの仕事の愚痴大会に変わつっていたのだが。

愚痴が愚痴を呼び、アルコールが体中を駆け回る。

意識も朦朧となりだした頃、お開きとなつた。

第六話 酒酒屋（後書き）

恋をするとは気となるものですよな。

さて、この先はどうなるのか？

次回をお楽しみに^ ^

プログラミングに参加しています。

面白こと思われた方は(^_^)【ポチッ】とお

願いします

第七話 テートの朝

翌日は酷い一日酔いに苦しんだが、日曜にはアルコールも抜け、体調も良かつた。

前日の夜は、デートに備えて早く寝たおかげで、顔がむくむ事も無く、化粧の乗りも良かつた。

散々迷った挙句に選んだ洋服は、少しでも若く見せようと、Gパンと七部袖のティシャツにチュニックと決めた。

腕には、幾つものハートが揺れる金のブレスレット。胸元にも同じハートをあしらつた、真珠がアクセントのペンダン。

ト。

口紅は、春をイメージして淡いピンクに朱を重ねた。

鏡に自分の姿を映し、

「若作りし過ぎかなあ」

と、悩むものの始めてのデートだ。

いくら昔の恋人とはいえ、洗いざらしの洋服で行く訳にはいかない。

「いいや、浩一ならきっと可愛いくて言つてくれるわよ！」

鏡に映る自分は40歳の年齢を隠せないが、浩一を想い描く自分は、大学時代へと飛んでいる。

そこには、若く輝く20代の若菜だ。時計を見ると、約束の時間が近づいていた。

「さて、出かけようか」

バックを持って、玄関へと進む。

気分は上々。

まるで、この世の春が一度に来た様な気持ちだ。

普段は余り履かないパンプスを出して、足を入れる。

「完璧！」

どうしてこんなに浮かれるのか自分でも不思議でならない。

いつもなら、せっかくの休日なのだから、ゆっくり寝て遅いブランチを撮るのが常だ。

ショッピングも映画も何もしたくない。

とにかく疲れを取る事、それだけに時間が費やされる。

しかし、今日の若菜は違っていた。

早くに目が覚め、念入りに化粧をし、早く時計が進む事ばかりを願っていたのだ。

まるで少女の様に心が弾んでいたのだった。

待ち合わせ場所に辿り着くと、真っ赤なスポーツカーが止まっていた。

（誰が乗るんだろうね、あんなど派手な車）

どうみても若い子が乗らない様になりそうもない。

若菜は、遠巻きに車を眺めながら通り過ぎようとした。

「若菜！」

どこからか、浩一の声が聞こえてくる。

辺りを見回すが姿が見えない。

「ひつちだよ」

まさかと思いながら車に向けると、サングラスを掛けてはいるが確かに浩一が乗っている。

（え！・・・ちょっと、趣味が・・・）

そう思いながらも近づいていくと、浩一が嬉しそうに車から出てきた。

「どうだい？ 若菜、学生時代に真っ赤なスポーツカーに乗りたいって言つてただろ」

確かに、学生の頃は赤いスポーツカーというのが流行っていた。

しかし浩一は、借金は作つても車を買う金は無かった。

結局古びたアパートの壁に、スポーツカーの写真を切り抜いて貼り、

「ひつか、これに乗るつー」

と夢を見るに留まつたのだ。

その夢は結局果たされる事は無かつたのだが。

浩一は楽しそうに笑いながら若菜を見ている。

(「こ」で本音を言つたら、せつかくの浩一の気持ちが無駄になるわ
ね)

「ほら若菜、君の夢を僕は実現したんだよ」

(今更実現されても・・・・)

「ええ、ステキね。でも、どうしたの?」

「買つたんだ、と言いたい処だけね。本当は今日だけの借り物さ
(良かつた)

「そう、今日の為にわざわざ借りててくれたのね、ありがとう浩
一」

一人は車に乗り込むと、浩一がセルを回す。
滑り出すように、車が動き出す。

「今日はどこへ行く?」

「そうね・・・」

どこへ行くかと聞かれると、思い浮かぶ所が無い。

映画?

デイズニーランド?

海?

どれも違うような気がするのだ。

「行きたい所が無いなら、俺に任せてくれるかな」

「ええ、いいけど」

「若菜に、是非見せたい場所があるんだ。ちょっと遠いけどいいか
な」

「見せたいって?」

「着いてからのお楽しみだよ」

車が静かにスピードを上げていく。

車内には、静かな音楽が流れている。

「この曲は若菜に似合うと思ってね」

と浩一が言つ。

「今日は一段と可愛いね。学生時代と変わらなによ」

と、若菜が喜ぶ言葉を並べる。

次々に飛び出す、浩一の言葉は心地良くな響き、若菜を夢の世界へ
とこぎなつていった。

第七話 テートの朝（後書き）

いくつになつても可愛いと言われたいのが女心ですね～＾＾；
さて、デートを楽しんでいる一人に何が起るのか、次回をお楽しみに。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（＾＾）【ポチッ】とお願いします

第八話 プロポーズ

車が高速道路へ入ると、猛スピードで景色が流れて行く。

楽しい会話が間断無く続く。

若菜を飽きさせない浩二の話術。

(昔はこんなに楽しい人じゃなかつた)

セピアカラーの記憶が蘇る。

アパートでTVを見ていた夜、どっちが好きなチャンネルを取るかで揉めた。

浩二が負ければ不貞腐れて口を利かなくなつた。

そういうつた浩二の態度が面倒で、負けた振りをしたものだつた。負けてあげれば、どんなもんだと言いたげに、嬉しそうにTVを見てはしゃいでいた。

一人きりの時間を楽しむ事のできる人ではなかつたのだ。

しかし、あれから18年だ。

18年の歳月が、浩二を大人の男へと変化させた。

今、若菜の隣でハンドルを握り、巧みな話術で時間の経つのを忘れさせてくれている。

(この人と、ずっと一緒にいられたら幸せだろうな)

(結婚したい。もう、40歳だもの)

景色が変わり、目の前に山々の連なりが広がつた。

「ステキね。山なんて久しぶりに見る景色だわ」

いつも、街中で靴をすり減らして歩き回っているのだ。

緑と言つても、街路樹が目に入るくらいなもので、自然と言える様な景色を目にしたのは本当に久しぶりだった。

「良かった。こんな田舎まで連れてきちゃって、怒られたらどうしようかと心配だつたんだ」

「良かつた。こんな田舎まで連れてきちゃって、怒られたらどうしよ

「浩一が連れて来てくれたんだもの、怒らないわよ
「若い頃だったら、こんな景色よりネオンがキラキラしてるのが楽しかったよな」

「そうね、あの頃は一体なんだつたのかしらね
若い頃……。

あの頃は、ディスコに行つて踊つたものだつた。

暇つぶしといえば、ゲームセンターだつた。

昼間遊ぶよりは夜のネオンが楽しかった。

とはいえる、お金が無い時代の若菜には、そんな遊びすら夢の様なひと時だつたのだ。

「今じゃ、夜な夜な遊びに行くなんてとんでもないけどな

「そうね、考えられないわ。疲れちゃって」

「若菜は、休みの日は何してるんだい

「そうねえ……」

寝てるというのが実際の話だが、さすがに40女が何もせずに休日を過ごしているというのは、体裁が悪い。

いくら昔の彼氏でも、暴露したくない事実もあるのだ。

「掃除とか、洗濯とか……かな」

「やっぱり、女らしいなあ。昔もそうだったよな

（そうだったかしら？）

「休日にどこかに行こうと言つても、掃除があるからつて出掛けなかつたよ」

浩一が、昔を懐かしむように笑う。

（あれはお金が無かつたからよ）

「俺はいつも外に目が向いてたな」

（そして、私はいつも一人だつた）

「めんな。本当に悪かった

（え？）

「あの頃の俺は、本当に酷い奴だつたよ。許してくれ

「許すだなんて……。もう、忘れたわ」

(覚えてるけど)

高速を下り、田舎道をどこまでも走り続ける。

しばらく走ると景色は田園風景から林道へと変わった。

更に奥へと進む。

「ここって、山の中かしら？」

「そうだよ」

「熊、でないの？」

「熊？」

浩一が大笑いする。

「笑わないでよ」

「ごめん、発想が可愛いかったもんだから」

「そんな・・・こんなオバサンを捕まえて」

「若菜はオバサンじゃないよ。とっても綺麗なレディだよ」

歯の浮くよくな台詞も、浩一が言えば様になる。

「ほひ、ここだよ」

浩一の声に顔を上げると、そこは湖だった。

「降りよ！」

「うん」

車から降りると、風が心地好い。

天高く伸びる木々の間から、木漏れ日が湖面に落ち、反射する。辺りの木々が水面に写り、まるで何かの絵画の様だ。

神秘的な世界がそこに広がっていた。

若菜はあまりにも美しい自然の中で、ため息をついた。

「きれい・・・・」

「そうだろう。若菜に見せたかったんだよ。こんなに美しい景色を誰に教えたいかと考えたら、若菜しか思い浮かばなかつたんだ」

胸が熱くなつた。

こんなに口マンチックな場所で、これほどぴつたりの台詞をもらえる女性が他にいるだろうか。

一人はしづらしく湖面を眺めていた。

「もう昼だな」

ぼんやりと景色を眺めていて空腹すら気が付かずにはいると、浩一が時計に目をやり、昼食の時間であることを告げた。

(そうね、これ以上のロマンスは現実にある筈ないよね)

若菜は今この瞬間に、浩一がプロポーズしてくれると最高だと考えていたのだ。

(再会したばかりで、それは無いか)

分かつてはいても、これほどの舞台が揃えば、女性としては最後の台詞が欲しいこところだ。

「腹減つただろ?」

「そうね。お弁当持つて来ればよかつたね」

こんなステキなところに来ると分かつていたら、手作りのお弁当を用意したものをと悔しさが込み上げた。

「そう思つてね」

浩一が悪戯っぽい顔でウインクして見せた。

車に取つて返すと、中から発砲スチロールの箱を持ち出してきた。

「箱がね、いまいちだけど。まあ、中は凄いぞ。」

そう言いながら蓋を開けると、中から洒落たプラスチックの箱がいくつも出てきた。

浩一は用意してきた敷物を敷くと、その上にいくつもの箱を並べ、蓋を開けた。

すると、美味しそうな料理の数々が飛び出してきた。
まるで魔法の様だ。

「これ・・・」

「俺が作った!」

「本当?!」

それが本当なら、到底太刀打ちできない。

「嘘だよ。すぐ本氣にするといふ、変わってないなあ

「酷い!」

「『めん、全部ちゃんとしたレストランの料理だよ。今日の為に作らせたんだ』

「えええ・・・高かつたでしょ?」

「どう見ても、数千円という値段には見えない。

「若菜が喜べば、それでいいんだよ」

笑顔がこぼれる。

「ほら、座れよ」

綺麗な自然を満喫しながら、最高の料理を食べ、ワインを飲んだ。

楽しい語らいと、美しい景色。

優しい恋人と美味しい料理。

全てが融合する。

食事が終わつても、その場から離れる事なく二人は話し続けた。
一人が離れ離れになつていて18年間を埋めようとするように、
お互ひの空白の時間を、時には悲しみを交え、時には笑いを交えながら語り続けた。

そして、若菜が3日前の客先での話を終えた時だった。

浩一が若菜の手を握つて、優しく悲しそうに呟いた。

「ごめん・・・そんな辛い思いをさせたのは俺だ。若菜がそんな嫌な仕事をしているなんて」

浩一の声が震えるのが分かつた。

若菜は浩一を見つめた。

「若菜・・・結婚しよう」

「浩一・・・」

「もう、そんな仕事はしなくていいんだ。俺が若菜を幸せにするから。ずっと傍にいてくれ」

全ての音が消え、聞こえて来るのは夢の様なプロポーズの言葉だけだった。

ずっと待つっていた、最高の舞台と最高のプロポーズ。

「若菜、『うん』と言つてくれ。離れていた18年、どれほどこの日の来る事を待ち望んで来たか知れない。お願ひだ、若菜」

若菜の目から、大粒の涙がこぼれた。

「ええ・・・・勿論よ。私も、ずっと待っていたの、
一と会える日を。」

一人の唇が、ゆっくりと重なつていった。

18年間。 浩

第八話 プロポーズ（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。
プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第九話 正体

都内のRホテル、最上階。

窓からは、街のネオンを一望できる、最高級の部屋。

浩一はシャワーを浴びると、ガウンのままビールを飲んでいた。時々思い出したように肩が揺れている。

テーブルの上には一台のケイタイが置かれていた。

一台はブルー、もう一台はゴールドだ。

「ゴールドのケイタイが鳴った。

浩一は通話ボタンを押した。

「よつー…どうだい、景気は」

相手は、仲間の治夫だ。

「おう、まずまずだね」

「昔の彼女とはどうだよ」

「ああ、今日プロポーズをしたよ」

「なんだ、随分早いな。まだ、再会して3日だろ?」

浩一が可笑しそうに肩を揺らす。

喉の奥から、クッククと漏れて来るのを止める事が出来ない。

「何だよ、そんなに楽しかったのか?」

「ああ、最高だったね。ちょっと、山の中の湖に連れて行って、豪華な料理を披露したら、いちこくだつたよ」

「じゃあ、プロポーズはOKしたのか」

「俺が、逃がすわけ無いだろ」

「そうだな、ムードの浩一といつたら知らない奴はないからな」「女はムードだよ」

「じゃあ、今日の舞台も気障な言葉の連続か?」

「そりやあそりやあ、40女は焦つてるからな。結婚願望が強いから、舞台を整えてやれば簡単に落ちるわ。しかも、あいつのツボは心得

てるからな。いくら18年のブランクがあつても、結局は同じ女だよ

「やうか、そいつはいいや。で?もう、頂いたのか?」

「金か?」

「いくらお前でも、金はまだ無理だ」

「そうだな、これからゆつくりと巻き上げてやるわ

「どの位頂くつもりなんだ?」

「一本は硬いだろう。」

浩一は指を一本立てた、それは1000万を意味している。

「40じゃ、かなり貯めてるだろうからな。面白いのを捕まえたな

「まさかあんな所で会うとはね。これも縁だうな

「昔の恋人が急に現われて、優しい言葉の連射じや、誰でも参るか」「俺に落とせない女はいないよ

「悪だよな。いくら俺でも、昔の恋人には手を出せないがね」「何を言つてるんだよ、俺達結婚詐欺師はモテナイ女に夢を『』えてやつてるんだ。これは慈善事業さ」

治夫が電話の向こうで大笑いをしている。

「で、その慈善事業で体の方も喜ばせてやつたんだろう?」

「体か?俺はな、40過ぎの女に興味は無いんだよ。肉が垂れてる女は醜いだけだ。今日も必死に若作りしてきたけどな

思い出すと可笑しくてたまらない。

「そんなに、可笑しな格好だつたのか?」

「ああ、あれはダメダ!若作りも行き過ぎだ!」

可笑しくてたまらないという風に、大声を上げた。

「あんまり可哀想だから、ちよつとキスしてやつたら、抱きついてきやがつたさ」

「それでどうしたんだよ。ビツせなら、茜のよしみで抱いてやれば良かつたのによお」

「よせや、興味ねえぜ。俺はピチピチした肌が好きなんだ。そうだな、35までかな」

「やりもしないで、よく巻き上げるよなあ」

「テクニックだよ」

ビールを口にし、タバコを咥える。

「それじゃあもう、お前にぞっこんで」とか?」「

「ああ、間違いねえな」

「次は、巻き上げに掛かるのか?」

「少しずつな、ああこいつのは一拳に高額を巻き上げると、後を出せなくなる」

「その辺は、ババアだけに硬いか?」

「そうだな」

ブルーのケイタイが鳴る。

ケイタイのディスプレーに田を向けると、《木崎恵美》と出ている。

「おひと、ピチピチの力モからの連絡だ、切るぞ」

「ああ、つまくやれよ。俺も次の力モを探しに行くか」

「頑張れよ」

「お互いにな

そういうと、浩一はホールドのケイタイを置き、ブルーのケイタイを手にした。

声のトーンをがらりと変える。

さつきまでの、皮肉な詐欺師の仮面を終い、善良な男性へと変わるのだ。

「もしもし、恵美」

「浩一。なかなか電話に出ないから、どうしたのかと思つたわ」

恵美は32歳。

独身のしだ。

「『めんよ、シャワーを浴びていたんだ。君に会いたくて、どうしよつもないよ』

「ああ、浩一私もよ」

「でも、『めんよ。』の間も言つたように、僕は今金作に忙しくく

て会つてられないんだよ。それが、どんなに辛いか……」「その事で電話したのよー。そのお金私に出させて頂戴ー。」

浩一の頬が緩む。

「なんだって！ とんでもない、ダメだよー！」

「いいのよ、私たちもうすぐ結婚するんですもの。浩一が苦しんでいるのに黙つて見ているなんて、私はそんなに薄情な女じゃないわ」「恵美……君は、なんて優しい女性なんだ。僕の目は間違つていなかつたよ」

「だから、浩一。今から会えないかしら」「恵美の声が艶っぽく聞こえる。

会いたくて仕方がないという気持ちが、手に取るようにな分かる。

見事に引っかかる女達。

(しばらく会わずにいれば、向こうから金を持つてやつて来てくれるもんさ)

皮肉な笑いが頬を引きつらせん。

笑いを堪えるのが大変だ。

「ね！ 会いたいの。お金はもう用意してあるわ。このお金を貴方に渡したいのよ。そうすれば、明日には全て解決するのでしょうか？」

「・・・・ああ・・・・そうだよ。ぼくは・・・・」

心から恵美の言葉に感謝していると言いたげに、言葉に詰まつている様に演出する。

演出。

全て、演出だ。

「浩一。私は貴方の悩みが解決できれば、それでいいのよ」「ソファにゆつたりと座り直す。

「そうか、ありがとう。恵美、今すぐ会いたい
ゆつくりと言葉を出す。

女の心に染みる様な、甘い、甘い口調、低く囁く様なトーン。

「私もよ・・・・会・い・た・い」

「ああ、今夜はずつと、君を抱きしめていたい。いいかい？」

「嬉しいわ」

電話の向こうで、女が頬を染めている様子が、手に取る様に分か
る。

「ううして女達は浩一の胸の中で喚起するのだ。
(慈善事業さ。俺は立派な実業家だよ)

「すぐに行くよ。待つてくれ」

そういうと、電話を切った。

ケイタイをテーブルの上に投げ出すように置くと、大声で笑つた。
夜の窓に映る浩一の顔に、邪悪さが滲んで見える。

「バカな女だ！」

可笑しくて仕方が無い。

「これで300万だよ。チヨロイもんさ！」

笑いを抑えると、徐に立ち上がり、着替えを始める。

恵美お気に入りの、柑橘系の「ロン」を点ける。

「ただ300万もらつたんじゃ悪いからな。せいぜい、夢の世界へ
連れてつてやるさ」

ジャケットを取ると肩に掛け、ドアを開けた。

結婚詐欺師、ムードの浩一。

それが、昔の恋人・・・山本浩一。

第九話 正体（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）【ポチッ】とお

願いします

第十話 音信不通

プロポーズから2ヶ月が過ぎようとしている。

楽しい時間は短く感じるものだ。

映画や食事、ドライブや遊園地。

浩一といえば、それだけで幸せだった。

ただ、あのキス以来何の進展も無い。

若菜はそれが不満だった。

どうしても、昔の情熱的な時期と比較してしまったのだ。

何度もかのデートでその話を匂わした事があつたが、浩一はこう言つだけだった。

「俺は昔の俺じゃない。大切な人を傷つけるような事はしたくないんだよ」

それが浩一の優しさなのだと若菜は思い込もうとしたが、あまりにも昔と違すぎる、多少の不満が湧いてくる。

（それにしても、キスくらい・・・）

と、思つてしまつのだ。

そんなわたしも無い不満よりも、更に大きな不安が押し寄せてきた。

最近、連絡が取れなくなっているのだ。

電話をしても、電源が切られている。

メールをしても、返事が返つて来るまでに時間が掛かる。

酷い時には翌日の夜になつて、疲れ切つた様な短いメールが来るだけだった。

（どうしたんだろう？プロポーズにおいて、連絡も寄越さないなんて・・・）

未来に相談しようとも思つたが、こんな事でいちいち相談するよ

うな歳でもないと、自分に言い聞かせていた。

仕事にも身が入らなくなつていてる。

徐々に連絡が取れない現状にストレスを感じ出しているのだった。

客先を出て商店街を歩いている時に田口する、子連れの夫婦。

(私だつて、もつすぐ結婚するのよ!)

以前は気にする事も無かつた光景に、やたらと腹が立つ。

(大丈夫よ、浩一はきっと忙しいのよ!)

そんな事を考えている時、ケイタイが鳴った。
ディスプレーを見れば、浩一の名がある。

「もしもし!」

しばらぐの間があり、浩一の声が聞こえてきた。

「・・・若菜」

「浩一、どうしたの?」

「ごめんよ、なかなか連絡が出来なくて」

「うん、心配したわ。どうしたの?」

「それが・・・」

どうしたのか、今までの様な快活な会話が出て来ない。
まるで奥歯に物が挟まっているかの様な、或いは喉に何かが詰ま
つてでもいる様な話し方だ。

「浩一?仕事が忙しいの?それとも、何か他にあるの?」

不安がよぎる。

(もしかしたら、プロポーズを撤回するとか?他に好きな人が出来
たとかじゃないわよね?)

そうは思つても、それを口に出して聞いてしまったら、全てが事
実になりそうで怖い。

「ああ・・・仕事も忙しいけどね。・・・大変な事が起きたんだよ

「大変な事?」

「だから、しばらく会えないんだよ」

「・・・」

会えないと言われて、どう答えて良いのか迷った。

一瞬、頭の中が真っ白になつた様な気がしたのだ。

「今日は、それが言いたくて電話したんだ」

「それ……どういう事……」

「……『ごめんよ』

「ねえ、大変な事つて一体何？」

これ以上は商店街の真ん中で話す事ではないと悟った若菜は、浩

に会いたいと痛切に思つた。

「浩一、今どこ?」

「S町にいるよ」

「……ここから近いわ。すぐに会いたいわ。大変な事が貴方に起きているなら、私に手伝える事があるかも知れないでしょ。だから、今すぐ会いたいの」

「でも、あまり時間が無いんだ」

「少しでいいの。話を聞くだけでいいのよ」

「……」

「もしかしたら、私に手伝える事があるかも知れないじゃない?」

若菜は電話を握り締めた。

その頃浩一はホテルの部屋で、のんびりと街並みを眺めながらケイタイに向かつて話していた。

頬には薄つすらと皮肉な笑いを浮かべながら。

ケイタイから若菜の悲痛な叫びが聞こえてくる。

(バカな女だ。そんなに俺に会いたいかよ)

「私は、貴方と結婚するのよ。プロポーズしてくれたじゃない?それとも、後悔しているの?」

「後悔だつて? ! とんでもないよ若菜。俺は、若菜と出会えてどれほど幸せだと思っているか・・・。君に教えてあげたい位だよ」

(そうだよ、たっぷりと教えてあげたいね)

「私だって、浩一と会えてどれほど幸せか。だからこそ、浩一の力

になりたいのよ」

「ありがとう、でも、君に迷惑は掛けられない。でも、若菜の声を聞いたら今すぐにでも会いたくなつた」

（そりだよ、会いたいんだよ。今すぐには）

「私がＳ町へ行くわ。どこに行けばいい？」

「・・・分かったよ、会おう。そうだな、Ｓ町のホテルMで会おう。

そこなら、俺もすぐに行けるから」

「ホテル・・・M・・・ね。分かったわ、後30分くらいで行けると思うわ」

「待ってるよ」

「ええ、待つててね」

「愛してるよ、若菜」

「私もよ。じやあ、後でね」

そう言うと通話が切れた。

喉の奥から、クツクツと笑いが込み上げてくる。

（どの女もバカだ）

（これから素晴らしいストーリーが展開するとも知らずに、夢を抱いてやつてくる俺の力モ）

（いや、俺の大金を持つたお姫様）

ケイタイをベットに投げ出すと、『ロロンと横になつた。

（30分か、しばらく時間があるな）

（若菜と会つても、その後を楽しみたいとは思えないからな）

ケイタイのアドレス帳を眺める。

（そりだな・・・ちょっと楽しめる相手をチョイスしておぐか）

選んだのは2日程前に捕まえたばかりの、ピチピチの力モだ。

（40女にや興味はねえよ。どうせなら、若い方が楽しめるつともんさ）

浩一はケイタイ番号をクリックすると、発信ボタンを押した。

第十話 音信不通（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（^-^）【ポチッ】と
お願いします

第十一話 最初の罠（1）

若菜は走り出した。

（浩一に会える！）

それだけで嬉しくてたまらない。

しかし、浩一の声は暗く沈んでいたのだ。

今にも壊れそうな浩一の心を思つと、今すぐに傍に行つて抱きしめてあげたくてたまらなくなつた。そして、自分に何が出来るのか。

その想いが昔と回じだとは氣づく筈も無い。

それは、浩一が多額の借金をした時だ。

あの時も浩一は暗く沈んでいた。

その浩一を助けたくて、若菜は必死になつた。

その為に夜の仕事に出たのだ。

まだ若かつた若菜は、夜の仕事がどういうものか漠然としか分かっていなかつた。

だからこそ飛び込めたのかも知れない。

何も知らず、何も分からずに、ただ浩一を救いたい一心だつた。

しかし、結果は惨憺たるものだつた。

若菜が稼げば稼ぐほど、浩一は怠惰になつていつたのだ。

そして、お決まりの別れ・・・。

しかしそれは全て昔の話だ。

今の若菜にとつては、浩一は昔の浩一ではないのだ。

そして、若菜も昔の様に全てを投げ打つて、飛び込める程の無謀さが無い。

だからこそ、昔とは違つ。

若菜は電車に飛び乗った。

いつもは速く感じる電車の動きが、どうしてこんなにもゆっくり動くのかとイライラする。

一分でも速く、一秒でも速く浩一のそばに行きたかった。電車がS駅に到着すると、ホテルMに向かつて走った。自分が周囲からどんな風に見られているかなと考える余裕が無かつた。

遠くにホテルMの姿が田に入ると、やつと歩を緩めた。荒い息を歩きながら整え、髪に手をやる。

髪を撫で付けながら、考えるのは浩一の事ばかりだ。ホテルの自動ドアが開きロビーを見渡すと、大きな窓を背に浩一が立っている姿が目に入った。

浩一の胸に飛び込みたい気持ちを抑え、ゆっくりと近づく。

近づきながら、浩一の顔を確認する。

それは、暗く沈んだ表情だった。

しかし沈んだ中に若菜に会えた安堵感が漂っている様に見受けられる。

「浩一」

浩一にやつと会えた嬉しさを隠す事が出来ない。

どうしても、笑みがこぼれてしまう。

（だめよ。浩一はきっと心を痛めているのだから、一瞬でも喜んでいたら）

浩一の気持ちを無視してゐるみたいじゃない

「若菜……。ありがとう、会いたかったよ」

浩一の手が畠を泳ぐ。

「じめん、つい……本当は、今すぐでも若菜を抱きしめたいんだ。でも、大事な若菜にそんな事は出来ない」

「浩一、いいのよ」

「いや、俺は昔の俺じゃないんだ」

まるで自分に言い聞かせている様な、搾り出すよつた言葉。

「浩一、本当に変わったのね」

一人は向かい合つ様にソファーに腰を置くと、互いに見詰め合つた。

それは、中年の男女の切ない愛の形に見える。

(会いたかったよ。若菜・・・もうすぐだ。もうすぐ、お前は俺を喜ばせてくれるのさ。お前の金は俺のものだ)

浩一の心の声が聞こえたなら、若菜はどんなに激怒するだひつ。しかし、若菜には聞こえない。

「何だかやつれたみたいだけど・・・」

「そりかな?」

以前はきつちりと着こなしていたスーツも、今ではネクタイを外し、スーツのボタンを外している。

「どうと無く疲れた感じが滲み出ているのだ。

「浩一・・・一体どうしたの?」

若菜は眉間にシワを寄せながらも、心配そうに聞いた。

「・・・実は・・・」

苦悩に満ちた表情。

「いや、いいんだよ。若菜の顔が見れただけで充分なんだから

「浩一、お願い。私を信じて、浩一の為にならどんな事でも出来るわ」

浩一の顔が妙に歪んだ。

それは、苦悩とも読めるだひつ。

しかし、違っていた。

(そうだな若菜。お前は俺の為なら何でもする女だったよ、昔から)(だからこそ、愛して止まないのさー)

二人が若かつた頃の別れのきっかけとなつた事件を忘れる事が出来ない。

あの時、ギャンブルに嵌つてしまい、結局気が付けば借金地獄に嵌つていた。

それも、借りていた相手がやくざだと気が付いたのは、200万

を超えた時だった。

貸す時には優しい態度を崩さなかつた相手も、ある程度の金額を超えた時から、口調が変わつてきました。返済を求めるようになり、期限を越えても払う事が出来ないと、叩きのめされた。正に、血反吐を吐くというのがこういう事なのかと知つた。しかし学生の自分に返済の手立ては無かつたのだ。最初の200万が、あつといつ間に倍になつた。恐怖で毎日が生きた心地がしなかつた。

そんな時、相手は囁いた。

「彼女がいるんだろ？助けてもらえよ」

彼女に助けてもらう。

（そうだ、何も自分が痛い思いをしなくても、あいつに働いてもらえばいいんだ）

「でも、彼女のバイト位じや返し切れないですよ
相手が野卑な笑いを浮かべて、こう言つたのだ。
「仕事なら、俺が紹介してやるよ。高額のバイトをな
（別に減るものじゃないんだ。構つもんか）

浩二はしつかりと頷くと相手によろしくお願いしますと、頭を下げたのだった。

第十一話 最初の罪（一）（後書き）

長らくお待たせいたしましたへへ；
なかなか、続きをつぶさにしましたが、やつと続きをつぶさでき
るところまで着ました。

毎回読んで下わつてこる皆わんこは、「迷惑をおかけいたしました。
では、この続आ。。。。

プログラミングに参加しています。

面白こと思われた方は（ ^ ^ ）【ポチッ】とね
願いします

第十一話 最初の罷（2）

（あの頃のお前は可愛かったよ。献身的で、どんな事にも耐えてくれた。おかげで借金が全て無くなつたんだ）

（ただ、残念だつたよ。あれきり、お前は俺に愛想をつかして出行つてしまつたんだからな）

（本当に、残念で仕方が無かつたよ）

浩一が目を上げると、若菜の真剣な顔があつた。

それは、若かつた頃のあの顔と同じだ。

（喜ばしてくれよ、若菜）

「浩一、どんな事でも私に話して頂戴。私たち結婚するんでしょ？」

「そうだな・・・」

若菜がじつと浩一を見つめる。

例え、どんな事を言われても、「驚かないから大丈夫」とでも、言つている様な目だ。

本当は、言いたくないんだが仕方が無いという雰囲気を出しながら、浩一はゆつくりと語り出した。

「実は・・・友達が事故を起こしてね」

それは、浩一の親友とも呼べる友達が事故を起しってしまったという内容だった。

更に、その友達が保険に入しておらず、大金を工面せねばならない。

しかし友達はちょうど失業中で、貯金を全部集めても足りない。友達の苦惱する顔を見ているのが辛くてたまらない。

「一体、いくらあつたらいいの？」

浩一は頭を振った。

「それが、言わないんだよ。自分の問題だからと黙つてね」

「・・・」

「でも、俺は何とかしてやりたいんだ。少しでも・・・足しになる

か分からぬいが、少しでも何とかしてやりたいんだよ

「・・・」

「それで、お金の手面をしていたの？」

「ああ、恥ずかしながらこんな歳になつても纏まつた金が無いんだ。だから、あちこち金作に走つていたのさ」

「どの位、集めるつもりなの？」

「あいつもある程度は持つてると言つてたからな。俺も少しあるし、あちこちに頼み込んで何とか形には成り出しているんだが、後200万あれば」

「200万」

「ああ、後200万あれば何とか形になるし、被害者にもそれなりの形で持つていいくことが出来るだら」

「結局、全部でいくら集めたの？」

若菜の目が光つたのを、浩一は見逃さなかつた。

昔の若菜なら、金額の事を言つた所でまるで分からなかつただろう。

しかし、今の若菜は保険外交員だ。

ここには、あくまでも友達同士の気持ちといつ、美しい話に纏めなくてはならない。

「大した額じやない。気にしないでくれ」

「気にするなど言われても。だつて、後200万つて、そりやあ損害保険だから・・・」

「若菜！君が保険の外交員だつて事は分かつてるよ。そういう事に詳しいのも良く分かつているんだ。だが、これは友達としての気持ちの問題だからね」

「・・・そんなに、詳しいわけじや・・・」

「男同士なんて、愚かな所があるものさ」

「・・・」

「金額じゃないんだよ。あいつが、落ち着いてくれればいいんだ。笑つてくれたら、それで俺はいいんだよ」

「その200万が揃わなかつたらどうするの?」

「・・・後できる」とは、街金しかないかと思つてゐるよ

「街金ですつて!」

思わず声が大きくなり、辺りを見回す。

ホテルのロビーをする話ではない。

誰に聞かれているかも分からぬのだ。

「ああ、借りられる所は全部借りたんだ。残つてゐるのはあの位だよ」

自嘲的に笑つて見せる。

若菜はじつと浩一を見つめていた。

話している間、ただひたすら浩一の顔を見つめていた。

それは恋する乙女が愛する男性を見つめるのとは違つて、【凝視】と言つた方が正確な気がする。

(くそ!昔ならとっくに陥落してゐるのに、何だつてんだよ)

若菜の田線が浩一から外れた。

(もつー押しか?)

浩一の心が、イライラと軋み出した。

(もつと、あつさりと落ちる筈だったのに、やっぱり昔の事があるから一筋縄じやいかねえか)

(よし、戦法を変えるか)

浩一は時計を見た。

「そういう訳なんだよ。分かつただろ?」

「ええ・・・」

「だから、しばらく会えないんだ

「しばらくつて、どの位?」

「分からぬよ。街金に借りれば、それを返済しなくちゃならないだろ。ゆくぐりと返済できるほど、奴らは親切じゃないからな

「そりや、そりだけど。街金に手を出したら・・・」

昔の事が蘇る。

アパートに帰ると、浩一が暗い部屋で明かりも点けずに待っていた。

明かりを点けると、浩一の顔が慄だらけで、瞼は大きく腫れ上がりつていた。

どうしたのかと聞くと、浩一は訥々と語り出した。

ギャンブルに嵌ってしまって、大変な事になってしまった。

このままでは、やくざに追いかれる。

「俺は、殺されちゃうよ。若菜、俺、死にたくないよ

「浩一」それは、自分達じゃどうしようもないよ。そんなお金ない

「あ

「でも、俺、死にたくないよ！」「

涙ながらに訴える浩一を、若菜は何とか助けてやりたかった。

「だって、普通にバイトしてたって、そんなの貯まらないよ

「普通のバイトなら、貯まらないよな」

浩一の眼光がいやらしく光った。

タバコに火を点けゆっくつと煙を吐き出し、若菜の体を舐めるよう上から下まで見た。

「良いバイトがあるんだよ。お前にしかできないバイトなんだ」

あの時、気づくべきだったのだ。

浩一が何を考えていたか。

しかし、若い若菜には想像出来る筈も無かった。

暗く沈んでいる浩一。

死にたくないと泣き叫ぶ浩一。

助けたいと思うだけだった。

「私にしか出来ないバイト？」

「ああ、若菜じゃなくちゃだめなんだよ。俺じゃ、金にならないんだ

だ。」

「そんな、良いバイトがあるなら・・・」

「俺の為に、ちょっとだけ頑張ってくれればいいんだ」

「浩一の為に？」

「ああ、俺の為にだよ。若菜……愛してるから、助けてくれよ」「うん……私も、愛してるよ。浩一の為になるなら、助けられるなら、頑張るよ」

(確かに、あのバイトのお陰で浩一の借金は無くなつたよね)

(でも、私は計り知れない苦痛を強いられたわ)

(だけど……だけど、今の浩一は、あの時の浩一とは違つわ)

(この人の目に嘘はない!)

(街金なんかに手を出したら、助けられなくなる)

(助けるなら、今しかない!)

若菜は硬く手を握ると、浩一に向き直つた。

「そのお金、私が出すわー！」

浩一の目が鋭く光つた事に、気がつく者は誰も居なかつた。

第十話 最初の職（2）（後編）

最後まで読んでくれたやつへあつがと「アーリー」がおまか。

といひて、自分でからお金を出すって書いたやつもしましたね～
若菜は「」の先輩になるのでしょうか。。。

次回をお楽しみに^_^

プログラミングに参加してます。

面白こと思われた方は（ ^ ^ ）【ポチッ】をお
願いします

第十二話 入金

そろそろマンションを購入しようかと、貯めて来たお金がある。若菜は、通帳を睨みながら「200万位なら、大丈夫よね」と自分に言い聞かせていた。

通帳から浩一の口座へと送金する。

簡単な作業だ。

出来る事なら、会つて渡したかったがこの先会つ暇が無いと言つ。あちこちに借金をしてしまったので、とにかく早くに返済をしないとならない。

その為、仕事量も増やさなくてはならず、毎日が泥のように眠るだけなのだと、若菜に説明したのだつた。

「だから、これからはなかなか会えないんだ」

浩一は、切なそうに若菜を見つめた。

「でも、返済が終われば、すぐにも結婚できるからね」

ならば、その返済分も若菜が出そうかとも思ったのだが、浩一は許さなかつた。

「いくらなんでも、俺も男だよ。昔とは違うんだ。俺にもプライドがある」「

そういうって、寂しそうに笑つたのだった。

疲れているのが、手に取るように分かつた。

そんなに大変なら、助けてあげたい。

しかし、浩一のプライドと言つ言葉に、胸を熱くしたのだった。昔を知らなかつたら、そんなバカなプライドと笑つたかもしれない。

しかし、昔の浩一を知つてゐるからこそ、今は黙つていよつとい。

を閉ざしたのだった。

「又、貯めねばいい事だものね」

銀行を出ると、浩一へと電話をするが、仕事が忙しいのか浩一が

電話に出る事は無かつた。

「しょうがないよ。借金を自分で返すって言つてるんだもの。昔とは違つんだから。きっと、一生懸命頑張つてゐるんだよ」

ブルーのケイタイが鳴つた。

ディスプレーには【若菜】とある。

浩一は閑静な住宅街の公園で、ケイタイを手にしていた。

「若菜か・・・」

暫く放つておくと、メッセージが入つた。

『浩一？仕事なのかな？お金振り込んだよ。仕事頑張つてね。・・・どうしても、どうしても無理だと思つたら、いつでも言つてね。私で出きる事なら、いつでも手伝つからね』

浩一の顔が歪む。

『会えないの・・・寂しいけど。頑張つてね』

喉の奥がクククと震えた。

可笑しさが込み上げてくる。

「本当にバカな女だな。昔も今も

「騙されているとも知らずに、自分から金を出すとは」

「いや、俺が上手いのか？」

「そうだな、俺はもてない女に夢を『えるのが上手』のセー・ベンチに座りながら、周囲に目をやつ、木々の揺らぎを見つめて

いると、昔の事が蘇つてくる。

若菜と同姓していた頃、貧乏学生だった。

それでも、遊びたくて仕方が無かつた。

バイトで、キャバレーのボーイをした事があつた。

あの手の女達を垂らしこむのは、簡単だつた。

いくらでも、貢いでくれたものだ。

その現実を若菜は知らないのだ。

(まあ、知つてたらもつと早く別れてただろうがな)

(さて、次はいつ頃にするかだな)

浩一は、競馬新聞を眺めながら思案していた。

(若菜の性格からだと、一ヶ月くらいか、いや、三ヶ月位は頑張つた振りが必要かな。)

(あんまり、間を空けてもなあ)

(たまには、会ってやらないと。小遣いも欲しいしなあ)

新聞を畳み、大きく伸びをする。

それにして天氣が良い。

風が気持ちよく、頬に当たる。

自然是平等に癒してくれるものだ。

(どれ、巻き上げた金で遊びにでも行くかな)

浩一はベンチから立ち上がった。

遊びがてら、次の獲物を物色するのだ。

(ビジネスを忘れちゃあ、いけねえやな)

スーツのジャケットを肩に掛け、歩き出した。

風が小さな渦を巻いて、舞い上がった。

第十二話 入金（後書き）

長らくお待たせいたしました。
やっとこの更新です^ ^ ;

200万円ものお金を入れてしまつた若菜。相手の顔とも知らず
にはまつてしまつてしまつてしまつてしまつてしまつてしまつ
どりますんでしうねえ。

さて、次回をお楽しみに。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第十四話 夢想

毎日が辛い。

仕事は何とか順調にこなしている。

足を使って、毎日顧客回りをし、飛び込みもしている。

新規獲得までは時間が掛かるが、地道な活動が実を結びそうな気配もある。

最近は、同僚から「綺麗になった」と賛辞を受ける事もある。

波風の無い毎日。

それでも、辛い。

以前なら、仕事が終わって帰宅する、それだけの生活でも何の苦

もなかつた。

それが、浩一と会えなくなつた今が辛いのだ。

どんなに会いたいか。

どんなに会いたいと電話したいか。

毎日毎晩ケイタイを眺めてはアドレス帳を開く。

浩一の番号をディスプレーに表示させて、センターボタンを押せば済む事なのだが、それはしてはいけない事。

今の浩一は、仕事で忙しいのだ。

お金を返す。

それだけの為に。

いや、そうではない。

お金を返した暁には、きっと自分を迎えてくれる。

次は、結婚式だ。

夢にまで現れる、結婚式。

浩一と自分。

真っ白なウェディングドレス。

白いタキシードの浩一。

神父様の穏やかな、澄んだ声。

ステンドグラスから射す、日の光。

誰を呼ばうか。

両親。

心友の未来。

会社の仲間。

みんな驚くだろう。

しかし、夢から覚めれば一人だ。
隣にいるはずの浩一はいない。

会いたさが募るのだ。

「浩一はいつまで頑張るんだろう」「

カレンダーに目をやると、再会の日から、5ヶ月が過ぎている。
会わなくなつてから、3ヶ月が過ぎようとしている。

夜の風が温かく感じたあの頃が、今では長袖でちょうどよい気候
だ。

夏も終わり、秋から冬へと木々が化粧直しを始めている。
木枯らしが吹くのも間もなくだろう。

ため息が出る。

「もうすぐ、41歳の誕生日だよ。」

40歳のウェディングドレスと、41歳のウェディングドレス。
大した違いは無い様に思うだろうが、本人にとつては大きな違い
だ。

「もういいよ、浩一！」

「もう、いいから・・・お金は、私が返すから・・・お願い、電話
してきて！」

涙が頬を伝う。

せつかぐの休日に、一人薄暗い部屋のベットの中で、泣いている自分が哀れでならない。

気持ちを切り替えてカーテンを開ければ、朝の陽射しが入つてくるのだが、それすら億劫でならない。

只々、涙が流れるに任せることしかないので。

「いつになつたら、結婚式を挙げられるんだろう？」

「本当に待つてたら・・・待つてるだけでいいの？」

「そつとケイタイを手にする。

すると、待つていた様にケイタイが鳴った。

浩一専用に登録した曲だ。

余りのタイミングの良さにケイタイを落としそうになりながらも、受話ボタンを押した。

「もしもし・・・」

恐る恐る、声を出す。

本当に浩一なの？

そう聞きたいのを堪えた。

「若菜？」

その声は、確かに浩一だった。

しかし、とても疲れた声で、暗く沈んで聞こえた。

「浩一、可哀想に・・・そんなに疲れて」

「ごめん・・・毎晩、深夜まで仕事してくるから。寝る時間が、ほとんど無くてね」

「それで、返済は・・・どうなの？」

「それが・・・申し訳ない」

「・・・」

「どんなに頑張っても、限界があるね」

自嘲気味に笑っているのが分かる。

「当たり前じゃない。でも、相手は待つてくれるんでしょう？」

「待つてはくれるだろうけど、俺が嫌なんだよ。相手にも、家族が

「いるしね」

「そうね」

「やっぱ、どうしようもなくなってしまった……思つてね」

(わりだよ、どうじみつもなこのやう)

浩一の心が騒ぐ。

(ここまで待たせたのは、お前がどうしようもなこほど辛くなるのを待つてたんだよ)

「会いたいよ」

(そうだらうや。)

「会いたいよ、俺だって会いたい。でも、会えば気持ちが揺るぐ」

「もういこよ。もつ、充分だよ、浩一」

「・・・」

「昔の事を気にしてんでしょう？」

「・・・そうだな、それもあるかもしれないね」

「浩一の気持ちは分かつたから。浩一が昔と違うのも、良く分かつたから」

「若菜・・・」

「だから、もう・・・お金の心配はしなくていいから」

「しかし・・・」

「浩一、こくらあればここなの？」

「・・・ダメだよ・・・若菜」

「ここによ、私は浩一と結婚するんだもの。私のお金は、浩一の物」

「あ

(わりだよ、俺のものだ！)

「・・・若菜・・・スマン

「こくらへ?

「500万だ」

笑いを押し殺すのに苦労する。

「500万・・・分かったわ。用意するから、どこで会える？」

最早、その金額が異常な金額である事にすら、考えが及ばなくな

つて いるのだ。

(この時を待つて たんだよ)

日時を決め、電話を切つた。

500万。

冷静に考える事が出来たなら、事故後の保障金額を友達の浩一が融通する金額でない事は、分かつたであろう。

しかし、今の若菜には考える事が出来ないのだった。

ベットから出ると、服装を整えた。

キャッシュコーナーで下ろすには、限度額がある。

それだけの額を揃えるには、平日でなくてはならないのだ。

だから、約束は平日の夜という事になつたのだが。

それでも、もづベットでめそめそと泣いて いる気分ではなくつていた。

浩一からのたつた1本の電話で、全てが好転したように若菜は気分が良かつた。

カーテンを開け、日の光を部屋に入れ、窓を全開にした。

これから新しい未来が待つて いるのだと、気分が晴れ渡つっていた。

第十四話 夢想（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第十五話 恋は盲目

晴れやかな気分の中、未来から連絡があった。

「若菜、何してる？」

相変わらず、テンションが高い。

元気な弾んだ声だ。

最近は未来の元気な声でさえ、若菜を元気付ける事が出来なかつたのだ。

「掃除して、洗濯して、布団干して、休日をトヨンジョイしてるわよ！」

元気な、明るい声が返つて来て、未来も多少困惑したのだが、そんな気持ちを悟られる事も無く話が続いた。

「ここにとこり落ちてる感じだったけど、今日は機嫌が良いのね」

「そうね、とつても晴れやかよー！」

「そう、よかつたあ」

「何で？」

ケイタイを耳に当てながら、カーペットに口ロロロと粘着テープを転がしている。

最近は、こんな事すらやりたいと思わない日が続いていたのだ。

「だつて、気分が塞いでるつて感じがもの凄くしたからさあ。新規が取れて無いからなのかなあって、結構心配してたんだよ」

まさか、恋愛が原因だとは思っていない様子だ。

「あはは・・・新規があ。そういうえば、取れてないわね」

「滅茶苦茶明るいわね。ちょっと、明るすぎて付いて行けないんですけど」

「「めん、」めん」

「どうしたのよ」

「それは・・・」

(どうしようつか。未来になら、言つてもいいよね)

(でも、電話じゃなあ)

どうせなら、思いつきり惚氣たい。

それが女心だ。

「こつちに来る?」

「若菜の家?」

「そう!久しぶりにホームパーティーしようよ」

「いいねー。じゃあ、彼も呼んだり?」

「彼?」

「昔の恋人、今の彼」

「ああ、浩一ね」

若菜が可笑しそうに笑う。

「浩一は忙しいから無理だわ」

「そうか、じゃ、女一人で寂しく楽しむか

お互に笑つて電話が切れた。

「じゃあ、久しぶりに料理でもしようかな」

若菜は鼻歌交じりで台所へと向かった。

今夜の楽しいパーティの準備だ。

夕闇が迫る頃未来がやつて來た。

手には大きなビニール袋を三つもぶら下げている。

「いらっしゃい」

「重かつたわよお」

部屋に入り袋を開けると、中からビールや乾き物が次々に出てくる。

「漬物も買つてきたよ」

ナスやきゅうりの漬物がテーブルの上に並ぶ。

「私も久しぶりに作りましたよ」

「おお!豪華な料理の数々!」

台所から運ばれて來る料理は、湯気を立てて、美味しそうに皿に盛られている。

「こんなに食べ切れないね」

「気分が良いから、たくさん作っちゃったんだよね」

テーブルに着き、お互いビールのプルタブを押し開ける。

「では、元気になつた若菜の為に、カンパーカン！」

「ありがとう！」

缶ビールが力ちつと音を立ててぶつかり、同時に口をつけた。

「さて、どうして元気になつたのか教えて欲しいな」

箸を持ち料理を摘み上げながら、未来が話を促した。

「うふふ・・・」

「気持ち悪いわねえ。40女の含み笑い」

「未来だつて、後5年もすれば同じじゃない」

普通の友達関係なら、年齢の事を言われば多少なりとも面白くは無いものだが、この一人にはそんな気遣いは無いのだ。

「後5年もあるよ」

「あつという間の5年だよ」

「で、どうして？」

あつとこう間に、ビールが1本空になる。

一本目のプルタブを押し開けながら、未来が促す。

「それがね・・・彼から連絡が来たのよ」

「彼つて、例の？昔の恋人？」

「そうよ」

「連絡が来たつて・・・ずっと、付き合つてたんでしょ？」

若菜は、又含み笑いをすると、ゆっくりと事の顛末を話し出した。話していくうちに、未来の顔が曇つてくるが若菜には分からぬのだ。

「今の若菜は自分の幸せしか見えていない。

恋とは、とかく盲目なものだ。

「だから、今回も返済のお金を出すんだけど、これが片付いたら、

いよいよ結婚に向けての準備が始まるのよ」

嬉しそうに話している。

しかし、どうしても未来には腑に落ちない。

最初が200万。

次が500万。

いくら結婚するからといって、それを出してくれと言つのも可笑しな話だ。

しかし、今の若菜にそんな疑問をぶつけた所でどうなるだろ。怒り狂つて浩一を弁護するか、友達の縁を切ると言い出すかだ。人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んでしまえと、昔の人は言つたものだ。

(今は黙つてるしかないか?)

(でもこのままじゃ、みすみす500万を渡す事になる)

(眞田になると人の話が聞こえなくなるのは誰でも同じだしな)

(どうしたらいい?どうしたら···)

若菜の嬉しそうな顔を見ていると、水を差すのも辛い。

しかし、どうしても納得がいかないのだ。

「ねえ、若菜あ

未来は、意を決したように若菜を呼んだ。

「なにい?なんか、真面目な顔おしてえ

「その話だけどさあ

「なんの話よお

「500万だよお

「ああー、浩一に渡すう?

テーブルに、頭を載せて、かなり酔つている若菜に更に続けた。

「それ···騙されてない?」

「···うん···」

しかし、若菜の意識は夢の世界へと飛んだ後だった。

「若菜あ。騙されてるんじゃないの?」

何度も若菜の体を揺り動かしても、起きる気配が無い。

未来は思案に暮れながら、9本目のビールを煽ると握り潰したの

だつた。

第十五話 恋は畠田（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第十六話 ウェディングへの一歩

休日が明け、朝一番に銀行へと急ぎ、500万を下ろした。通帳が大分寂しくなったが、それでも若菜は幸せだった。銀行では、500万という纏まつた額を下ろす事で多少面倒だったが、それでも全額が若菜の手に渡された。

若菜は大事そうに、バツクに終うと銀行を後にした。

銀行から出ると、浩二のケイタイへメールをする。

『お金の準備が出来たわ』

即座に返信が返つて来た。

『時間が出来たから、すぐにでも会えるけど、若菜はどうかな?』
嬉しかった。

すぐにでも会いたかったのだ。

しかし、今から客先へ行く仕事がある。
(どうしよう・・・でも、会いたいし)
(お客様には、予定を変えてもらおう)

『大丈夫。今すぐでも会いたいわ』

浩二から再び連絡が来る。

『Kビルの地下にある、ポプリという店で会おう』

『分かったわ。すぐに行くから』

『ああ、待ってるからね』

メールを終えると、すぐさま客先の電話番号に掛ける。数回のコールの後、相手が出た。

相手はマンションに暮らす夫婦だ。

今日の約束が明日に伸びた所で、大した支障があるとも思えない。案の定、相手は快く了承してくれた。

『申し訳ありません』

と、何度も営業用の侘び台詞を繰り返し、若菜は電話を切った。

Kビルに着き、地下に下りる。

朝も早い時間だというのに、人でごった返していて歩き辛いが、歩く事に慣れているので、苦にはならない。

しかし、歩く事は大した事ではないのだが、気持ちが急ぐ。その為、自分の前に人がいる事で、どうしても苛立つてしまう。（こんな事でイラ付いてたら、良い奥さんになれないわね）（でも、今日は仕方ないよ。だって、久しぶりに浩一に会えるんだもの）

足がひとりでに速くなる。

人を縫うように進み、やっと《ポプリ》に着いた。

店の前は綺麗に掃除がなされていた。

小さな黒板が看板の代わりなのか、店の名前とお勧めメニューが書かれている。

黒板の周りには、造花があしらわれ可愛らしさをかもし出していた。

それはまるで、若菜と浩一のこれからを祝福する、小さな入り口に見えた。

若菜は、店のドアをそつと押し開けた。

ドアに付いているベルが涼やかに響く。

店内には数人の客がいるだけで、音と言えば小さな音でクラシックが流れている程度だ。

カウンターの傍には、ウエイトレスが所在無げにナップキンを折りたたんでいる。

若菜に気が付き、「いらっしゃいませ」と儀礼的な言葉を発した。

「待ち合わせなんですが・・・」

ウエイトレスに言いながら店内を見回すと、店の奥のテーブルに浩一が座っているのが見えた。

「あ、彼です。ありがとうございます」

穏やかな笑顔をウエイトレスに向か、浩一の方へと歩き出す。

若菜がテーブルに着くと、浩一が優しく迎えてくれた。

すると、即座にウエイトレスが水とお絞りを持つてやって来た。

若菜はそつと笑顔を向けると。

「コーヒーを
と一言伝えた。

「コーヒーが来るまでの間、互いを労わり合つ優しい眼差しが交わ
されていた。

若菜は浩一の疲れ切った様な姿が、辛く哀しかった。

その姿に涙が出そうになつたが、じつと耐えた。

ここで涙を流しては、まるで浩一が若菜を泣かせてくる様に見え
る。

それは、相手を思いやれる年齢の若菜には、してはならない事な
のだ。

それでも、胸が熱くなり言葉が出て来ない。

「コーヒーがテーブルに置かれウエイトレスが下がると、ようやく
浩一が口火を切つた。

「スマナイ」

疲れきつた姿。

再会した時はスーツをビシッと着こなし、一つの隙も感じられなかつたのに、それが今はどうだ。

若菜は、何を話して良いのかさえ分からなくなっていた。
会えない時間が長すぎたのだ。

もし、自分が傍に居たなら、こんなに疲れ切つた姿になつている
筈が無いのだ。

「浩一、ごめんね」

「どうして若菜が謝るんだ」

「だって・・・私が、傍についてあげたら・・・そんなに・・・
言葉が詰まる。

泣きたいのを堪えて話をする事が、これほど辛いとは知らなかつ
た。

「若菜のせいじょなによ。俺が悪いんだ。それなのに、今度も若菜に迷惑を掛けちゃうね」

浩一のその言葉で、自分が何をしに来たのか思い出した。

余りにも会えなかつた時間が長すぎたので、会つた瞬間に全てが忘れ去られてしまつたのだ。

若菜はバックから500万の入つた封筒を出すと、浩一の前に置いていた。

「これ・・・500万入つてます」

声が小さくなる。

「これで、全て終わるのよね」

浩一は封筒を手にすると、無造作にバックへ入れた。「ああ、これで全てが終わるんだよ。次は結婚式だ」

「良かった・・・」

「そうだな。」コーヒーが冷めるぞ、飲んじゃえよ」

金を手にした瞬間に、浩一に安堵感が漂い、言葉が存在になつてしまつたのだが、若菜は気が付いていない様だ。

「うん・・・」

ほつとしたようごに、「コーヒー」に手を伸ばして口にする。

それを見て、浩一もほつとしていた。

(いけねえ、つい地が出ちまつた!)

「じゃあ、俺行くから」

浩一が立ち上がつた。

若菜が「コーヒーカップ」をテーブルに置きながら、浩一を見上げた。

それは、「え?どうして?これだけなの?」と言つている様に見受けられる。

「若菜、この金を友達に返さなくちゃならない。それも、早急にな

「あ・・・ええ、そうね」

「だから、今日はゆっくりは出来ないんだよ。」めよ
「いいのよ、早く返した方がいいわ

「次は、式場を決めに行こう」

式場とこう魔法の言葉にて、若菜の心が躍った。

「そうね、そうしましょー。」

「じゃ、又な」

「待つてー今度はいつ?」

「・・・」

浩一の顔が曇る。

（面倒臭せえなあ。）「こいつ、こんなに面倒な女だつたか？昔は都合のいい女だつたがな）

浩一が若菜の椅子の背もたれに手を置き、顔を近づけた。

「又、電話するよ」

そういうと、軽く唇にキスをした。

「だめよ、人が見てるわ」

嬉しい気持ちを抱きながらも、拒んでみせる。

出かける事ならこのまま一緒に居たい。

「じゃ、そういう事で」

浩一が軽い足取りで、店を出て行った。

ウエイトレスの投げやりな言葉が浩一を追いかける。

「ありがとうございましたあ」

若菜は頬を両手で覆いながら、一口元が緩むに任せていた。

テーブルには、一人分の伝票が残っていた。

第十六話 ウェディングへの一歩（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面倒にと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第十七話 ウエディングドレス

数週間後、式場を選ぼうと浩一から連絡があった。

「友人の紹介で、良い式場があるそうなんだよ」

浩一は予め用意していたパンフレットを若菜に見せた。

枯葉が足元を舞う公園のベンチで、若菜はそれをゆっくりと眺め始めた。

真っ白な建物。

広いロビー。

大きなプール。

真っ白なウエディングドレス。

シャンパンを手にした新郎と新婦。

チャペルが併設され、バージンロードには真っ赤な絨毯が敷かれている。

夢にまで見た、バージンロードだ。

「ウエディングドレスもレンタルできるんだよ

浩一が言う。

「ステキねえ」

「若菜だったら、シンプルなドレスの方が似合つだらうな」「そうかしら」

「ゴンドラで登場なんてのも、あるそつだよ」

「大きなウエディングケーキね」

「そうだね」

見れば見る程、夢の世界が実現する予感が高まる。

(もうすぐなのね)

浩一を見れば数週間前の疲れ切った様子とは打って変わって、はつらつとしている。

全てが解決し、全てが順調に流れ出していると感じさせる笑顔。

「幸せだわ・・・」

思わず口から漏れる言葉だ。

「ああ、俺もやっと幸せになれる」

(いや、もつと幸せになれるよ、俺は)

「ここでいいわ。見に行きましょうよ」

若菜の目が笑っている。

もう、何者にも邪魔されないと、自信と、安心。これから幸せしか思い描けない、心。

「そうだな・・・見に行くか」

(どうせ式なんて挙げないけどな)

「新婚旅行はどこへ行く?」

更に話が広がる。

「新婚旅行か、考えてなかつたな」

(そこまで、考えるかよ。馬鹿馬鹿しい!)

「嫌ねえ、新婚旅行を考えてなかつたなんて」

若菜が可笑しそうに、くすくすと笑う。

「でも、俺は金がないからな」

「大丈夫よ、私の貯金があるわ」

「それはダメだよ。式の金も若菜が出しきかないんだから、その上新婚旅行もなんて」

「いいのよ。だって、一生に一度なのよ。私が行きたいんだから」

「こりやあ、頭が上がらなくなりそうだな」

「そんな事ないわ。大事な旦那様よ」

目を合わせては、笑う。

しかし、その笑いの意味がお互い違う事を知っているのは、浩二だけなのだ。

(式の金も旅行の金も全て現金で預いてやるから、安心しろよ)

その日は、式場を見に行き旅行会社でパンフレットを貰つて終わつた。

若菜はそれらを大事にバックに入れながら、「後で又、ゆっくり見

るわ」と笑った。

浩一はタバコに火を点けながら、横田で若菜を見た。

「ああ、俺には分からないからな。若菜が気に入ればいいよ」

そう、優しく言って返した。

(分からうとも思わないさ)

久しぶりに一人で食事をし、少量のお酒を飲み分かれた。家まで送ってくれるものとばかり思っていたのだが、浩一は「じやあな」と言うなり背を向けて歩き出したのだった。

ふと、昔の事が思い出される。

仲間と飲みに行つた夜。

帰らうと言う若菜に、先に帰れと言つ浩一。

他のカップル達は、どちらかが帰ると言えば必ず双方伴なつて帰つて行つた。

例え、帰る場所が違つても「俺が送るから」と言つていたものだ。しかし、浩一は昔からそんな事はなかつた。

「そういうところは変わらないんだ」

可笑しかつた。

出来れば変わつて欲しい部分である筈なのに、逆に変わつていな
い事に安心感があるのだ。

若菜は、一人ほくそ笑みながら、浩一に背を向けて歩き出した。

「冗談じゃねえ」

浩一はブルーのケイタイを取り出すと毒づいた。

(いつまでも食えない女相手に、恋人じつこもねえよ)

ケイタイのアドレス帳を開く。

(若菜の相手をすると疲れるよな。やつぱり、変に昔を知つてゐるか
らかなあ)

浩一の指が、一つの番号を選択する。

(口直しが必要だぜ)

呼び出し音が鳴る。

(やつぱり、ピチピチとしつぽりつてな)

卑猥な笑いが浮かぶ。

電話の向こうで、明るい女の声が聞こえてきた。
「会いたくなつてね」

浩一の声が優しく響く。

コートの襟を立て寒さにかじかむ手をポケットに入れる。
獲物が嬉しそうに電話の向こうで笑っているのが分かる。
(まずは体を温めて、懷も温めもらおうか)

浩一の巧みな話術が女を誘う。

携帯からは、女の切なげな吐息が漏れ続けていた。

第十七話 ウェディングドレス（後書き）

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお願いします

第十八話 幕開け

それからは、毎日が夢の様に過ぎていった。

週末には、ドレスを見に行つたり、他の式場を見に行つたり。引き出物はどうするか。

招待客は誰にするか。

しかし、そのほとんどが若菜一人で決めていた様なものだった。

浩一は横で微笑むだけで、何も口出しをしないのだ。

興味が無いのか、はたまた、全て若菜が気に入る様にやれば良いという配慮なのか。

勿論若菜には簡単な話だ。

何をどう決めるのか、それくらいの事は今までのキャリアからすれば、なんという事はない。

だが、結婚となると、一人で全てを決めるのは寂し過ぎる。式場の人気が、ご主人様のご意見はと水を向けても、彼女に任せてありますので的一点張りだ。

さすがに若菜も苦言を呈した。

「自分の結婚式なのだから、少しは自分の意見を入れて欲しいわ」とすると、浩一はニッコリと笑つて、こう言つのだった。

「俺は、若菜が傍に居てくれたら、それだけで充分なんだよ。全て、若菜の良い様にして欲しい」

そう言われてしまえば他に言いようがない。

結局若菜が、段取りの全てを行うというスタイルが続けられるのだった。

街がクリスマスムードで賑やかになりだした頃、結婚式の日取りが決まった。

「6月がいいな。6月の花嫁は幸せになれるって言うだろ?」

浩一が始めて、結婚に関して自分の意見を言ったのだった。

その一言で、結婚式を6月に行う事になった。

若菜にしてみれば、もつと早くに式を挙げたかった。どうしても40歳の内にウエディングドレスを着たかったのだ。

それ故、一人忙しい思いをして、結婚式の段取りを付けて来たのだ。

まさか、来年になるのだったら、こんなに早急に全てを決める事も無かつたのだ。

内心、（それならば始めから言つてくれたら良かつたのに）とう、不満が無い訳ではなかつたが、浩一の希望を聞かない訳にはいかなかつた。

（夫を立てるのは、妻の務めよね）

ところが、6月の挙式まで後一ヶ月といつある日、浩一から連絡が来た。

それは、唐突過ぎるほど、唐突な話だつた。

「若菜、大変な事になつたよ」

「どうしたの？」

「お袋が、入院したんだ」

電話の向こうからショックを隠そつとする、浩一の息遣いが聞こえてくる。

「お母さんって、北海道の？」

浩一は北海道から大学入学の為に出て来て、そのまま帰らなかつたのだ。

勿論、若菜がそれをとやかくは言えない。

若菜自身も同じ様なものだ。

「そうだ。一人で頑張つてたんだが、2日ほど前に倒れて、病院へ運ばれたそうだよ。」

「それで、状態は？」

「それが、良くないらしい。検査をしてみないと分からぬが・・・

「

「浩ー・・・」

「だから、しばらく北海道へ帰る事にしたよ」

若菜の頭に、結婚式という文字が浮かぶ。

「そうね・・・そうした方が良いわね。私も一緒に行こうか?」

「いや、はつきりしないのに、女性を連れて行く訳には行かないよ

確かにそうだ。

どんな病状かも分からぬのに、どここの馬の骨かも知れない女を連れて帰つたのでは、話がややこしくなる。

「分かつたわ。向こうに着いたら、連絡を頂戴ね」

取り急ぎという感じで、電話が切れた。

若菜はケイタイを握り締めて途方にくれた。
「どうしよう・・・もし、お母さんの状態が悪くて、彼が戻つて来れなかつたら・・・」

若菜は不安で立つてゐる事が出来なくなつていた。

涙が頬を流れる。

どうしようもない不安。

これが、次の戻の幕開けだとは、知る由もなく・・・。

未来から連絡があつたのは、その日の夜だった。

「若菜、気分はどう?」

浩一からの連絡を受けてから、気分が沈み、とても仕事など出来そうに無いと判断した若菜は、営業所に連絡を入れていたのだ。

勿論未来にも、仕事を切り上げる旨の連絡を入れていたのだった。

「うん・・・とつても、苦しいの・・・」

涙が止まらない。

あれから、アパートに戻り膝を抱えて泣いていた。

電気を点ける気力もない。

只々、不安に打ち勝つ為に今を乗り切る為に泣くしかないのだつ

た。

「重症だね。今からそっちへ行つてもいい?」

「うん、いいけど」

「何も食べてないんでしょ?」

「うん、食べてない・・・」

「未来は電話を切ると、若菜のアパート目指して歩を進めた。

今の若菜の状態が、一体何が原因なのか大よその検討は付いている。

あれほど明るく、結婚の話をしていた若菜が、急に沈み込むというのは解せない話だ。

未来の頭の中では、浩一の化けの皮をどう剥がすべきか、その計画ばかりが渦を巻き出していた。

アパートへ付くと、首を項垂れ、目が腫れている若菜が出迎えてくれた。

(ああ、やつと結婚だと思ったのに、元のどじの事があつたんだなあ)

未来は、靴を脱ぐとテーブルの上にコンビニの袋を置いた。

中から、弁当が二つと惣菜が幾つか出てきた。

そして、悪戯そうに、缶ビールを出すと若菜に一本を渡した。タオルを握り締めて、頻繁に涙を拭いながらビールを受け取る。

「要らないわ。飲みたく無いのよ」

「だめよ、飲んで嫌な事は忘れるのよー」

一人でテーブルに着き、弁当のラップを剥がす。

若菜の暗く沈んだ顔を横目で見ながら、元気に「頂きます」と声を張上げる。

「ほり、食べないと、浩一さんに嫌われるわよ」

浩一とこの名前を聞いた途端に、又しても涙が流れる。

(やつぱり・・・。こうなると、思つたんだよね)

「一体、どうしたの?」

大よその検討は付いているが、はつきりとした事を聞かねばなら

ない。

「それが……浩一の、お母さんが入院して……しばらへ、実家に帰るつて」

(ああ、そういうとか。詐欺師が良く使う手だよね)

「それで? 入院しただけなんでしょう?」

「うん……でも、不安で……」

涙が止まらない。

「だつて、結婚式だつて近いのに」

「そういう事もあるわよ」

(本当にらね)

「でも、もしも……病状が悪くて、帰つて来れなかつたら」「うん」

「せつかく、結婚式の準備を進めて来たのに、結局式を挙げられな
いかも知れないわ」「…」

(不安の原因は、そつち?)

「どうしよう、式場だつて押されたのよ」

「……あのさあ、若菜……まだ、分からぬじやない。落ち着
きなよ」

「うん、やっぱ思つんだけど、何だか分からぬけど不安でしょ
がないのよ」

「浩一さんも向ひに着いて、はつきつしたら連絡をくれるでしょ
う」「う

「そうだとと思つナビ」

「今不安がつていても、どうにもならないよ」

「分かつてゐるよ。分かつてゐんだけど……」

「そう言つと、又してもワツと泣き出してしまつた。

(ようやつと、結婚だものね。分かる気もするけどさあ。もつと、
凄い事が待つてゐる様な気がするんだけどなあ)

暫くすると落ち着いて弁当に箸を付けられる状態になつた。

何とか、不安を口にしながらもビールに口を付ける。

未来はそんな若菜を見つめながら、そっとため息を付いていた。

若菜が酔いつぶれた後、未来にはする事があった。

今日の目的は若菜の愚痴を聞くところよりは、その目的を果たす為だ。

未来は若菜のケイタイを手にすると、浩一の番号を自分のケイタイへと転送したのだ。

そして元あつた場所へ置くと、部屋を出たのだった。

（必ず、若菜の仇を討つてやるからねー。）

そつと玄関を閉めると、ゆっくりと歩き出した。
深夜のアパートに、ヒールの音が響いていた。

第十八話 幕開け（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第十九話 最後の情事

その頃浩一は都心から外れた郊外で、のんびりとアバンチュールを楽しんでいた。

相手は、目下のカモ木崎恵美だ。

恵美も又、浩一に結婚をエサに多額を巻き上げられている。

「ねえ、雄。いつになつたら、結婚してくれるの？」

汗の光る胸を隠そぞともせずに、浩一に寄り添う。

興奮の後の一服を楽しんでいた浩一は、ゆっくつと恵美に視線を向けた。

「仕事が順調に波に乗つたらだよ。もう少しなんだけどな」「もう少し、もう少しつて、もう一年だよ。」

「怒った顔も、可愛いよ」

「雄はいつもそうやつて誤魔化すんだから」「誤魔化してるわけじゃないよ。ただ、事業を成功させる為には、どうしても金が要る」

「この間、渡したじゃない」

「あれだけで足りると思うところが、可愛いよな」

可笑しそうに笑つてみせる。

「笑わないでよ！」

「いいか、事業つていうのは金が掛かるものなんだよ。俺一人で、全てをこなせる訳じゃないんだ。どうしても、電話番が必要になる。その電話番の給料だつて払わなくちゃならないんだ」

「今時・・・ケイタイがあるじゃない」

「ケイタイは、ケイタイ。電話番が居るつて事が、会社として大事なんだよ。お客様が電話を転送して分かつたら、信用が無くなるだろ」

「う・・・ん」

「恵美がどこかの会社に電話して、転送された電話に相手が出たら

どうだ？ よつぽど小さな会社だと思わないか？

「そりゃ、そうだけじ」

恵美の髪を撫でながら、優しく呟いてみせる。

「俺は、自分の為に頑張ってるんじゃないんだ。恵美、お前の為なんだよ。お前に、不自由な暮らしをさせられるか？」

「私は構わないのよ。雄が居てくれたら、それだけでいいの」

「俺は、40歳だよ。お前の『』両親に会うにしても、今の身分じゃお嬢さんにくださいなんて言えないよ。俺が親でも怒るさ」

「そとかなあ・・・」

「もう少しで波に乗れるんだ。その為には金が必要なんだよ」

執拗に、金の話を持ち出す。

結婚したがっている相手には、それがあれば結婚できると仄めかす。

「これが浩一のやり口だ。

「後、どの位必要なの？」

「500万つてどこかな」

「500万！？」

「ああ、事業だからね。それなりの投資は必要だ」

「だつて、私・・・お金の事をとやかくは言いたく無いけど、雄には800万も渡したわよ。それでも、まだなの？」

「恵美、仕方が無いのさ。お前には分からんだろうが、仕入れには金が掛かるんだよ。店舗も借り物だ。接待費も使わないと、客は付かないからね。日本って国は、そういう国なんだよ」

困惑した様な恵美の顔。

「そんな、困った顔をするなよ。俺が何とかするから、後500万、金作が出来ないようじや、事業主とは言えないからな。」

浩一は、ベットから下りると風呂場へと向かった。恵美が、裸体のまま着いて来る。

「当てはあるの？」

「一緒にいるか？」

「うん・・・当ては、あるの?」

「当てか?無い事も無いな。」

湯船に体を沈める。

さつきまでの、燃えたぎるよつたエネルギーを放出した後だけに、疲れが体全体を支配する。

32歳とはいえ、子供を生んでいない恵美の裸体は、未だ張りがある。

浩一は目を細めて、細部まで舐める様に見ていた。

恵美の体が、ゆっくりと湯船に浸る。

(若い時は、このままもう一戦出来たんだがな。俺も、歳かな)

「どんな当てなの?」

恵美が、執拗に繰り返してくる。

浩一は、しつこく聞かれるのが好きではない。

勿論、しつこく聞かれる事は端から想像はしているのだが、それでも面白くはない。

(全く、女って奴は、どうしていつもいつもそこなんだ!)

情事の後の余韻を楽しめるのは、出合つたばかりの初々しい頃だけだ。

その時期を過ぎれば、裸体を隠す事すらしなくなる。

それはそれで目の保養なのだが。

「金持ちのお客さんがいてね、出してくれても良いこと書つてあるんだよ。」

「へえ、凄いじゃない!」

「そう、凄い話だね。ただし、条件付だ。」

「何?」

「金持ちのお客さんは女性だ。しかも50歳は超えてるね

「うん・・・」

「暇な時の相手をして欲しいそつだ」

「暇な時の相手・・・つて」

「そうだよ、恵美にしている事を、その女性にもするとこう事だ」

そう言いながら、浩一の手が恵美の乳房を掴んだ。

「それって！……」

あながちこの話も嘘ではないのだ。

次のカモが結構な金持ちだからだ。

年齢は、若菜よりも上だが、見た目には若い。

さすがに金持ちだ。自分に時間と金を掛けているのだろう。

恵美が何と言つたか、その反応が面白そうだと思つたまでだ。

誰が何と言おうと浩一の客だ。頂くものを頂かねばならない。

更に言つなら、年齢的には範疇では無いのだが、この際金額がで

かい。

ある程度のサービスは必要だろう。

「こには、ビジネスとして考えなくてはならない。

「いやだ！だめよ！そんな事、そんな事する位なら私が何とかするからやめて！…！」

（そう来ると思ったよ。お前の性格ならな。）

浩一は、心の中で笑つた。

「そつは言つても、恵美だつて際限なく貯金があるわけじゃないだろ？」

「そうだけど。でも・・・後、500万でしょ？それだけあれば良いのよね」

「そうだ、それだけあれば、何とかなる筈だ」

「私の貯金が、後400万あるわ」

「それじゃあ、100万足りないよ」

「大丈夫よ、銀行から借りるから。それがだめなら、親に頼むわ。」

「それでもダメなら・・・街の金融業者に借りるわ

徐々に声が小さくなつてくる。

（そうだな、街金に限度いっぱい借りてもいいぞ）

「ありがとう、恵美。そこまでして・・・嬉しいよ。一人の未来の

為にそこまでしてくれるのか」

浩一の舌が、恵美の項を這つ。

そこが恵美の喜ぶ場所である事は、承知しての行動だ。

(もつと絞りせて貰うんだ、最高の喜びを味あわせてやるぞ)

恵美の喘ぎ声が、切なく浴室に響き渡った。

第十九話 最後の情事（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第一十話 容態

浩一から連絡があったのは、3日程してからだった。

何も手に付かない状態でも、仕事はしなくてはならない。
一人でいれば、余計に暗く沈んでしまう。

営業に回つていれば、少なくとも密と会つてゐる時だけは、浩一
の事を忘れられた。

とにかく今は仕事をするしかないと、自分に言い聞かせていたの
だ。

そんな中、浩一からの電話だ。

ちょうど密先で商談していた時だったのだが、若菜は「緊急な電
話なので」と外に出た。

夏が来る事を知らせるように、アジサイの花が蒼く輝いている。
そろそろ雨に当たつて、自分達の美しさを見せびらかしたいのだ
らうか。

花たちが、一斉に若菜に微笑んだ様に見えた。

そんなアジサイを眺めながら、若菜は送話ボタンを押した。

「もしもし?」

「若菜、大変な事になつた。お袋、心臓が悪かつたらしく
「心臓・・・」

「ああ、それもかなり前からだつたみたいで、その為に今回倒れた
んだそうだ」

「そう・・・それで?」

「手術をしないと、助からないそうだ」

「・・・・・」

「でも、金がないんだよ」

電話の向こうで、泣いてるのが分かる。
この3日間、どれほど苦しんだのだろう。

「そう・・・お母さん、保険は?」「いや、何も入っていないらしい」

「それは・・・」

「有り得ない事ではない。

一人で暮らしていく、生活が苦しければ保険にまで手が回らないものだ。

いくら息子がいても、つい数ヶ月前には自分がお金を使立てる程だつたのだから。

まして、結婚資金すらない人だ。

「兄弟は?」

「兄は・・・音信不通だよ」

悔しそうに語る浩一。

その悔しさが伝わって来る様だ。

「妹さん、居たよね」

古い記憶を呼び覚ます。

大学時代に交わした会話。

「妹の所も苦しくてダメなんだ。金の話になると、自分の所は借金があるからって」

「そう・・・心臓なの」

心臓の手術となれば、多額の医療費が掛かる。

事によつては保険対象外だ。

例え、保険内で何とかなつたとしても、ベット代や食事代など掛かるものは出てくる。

それは、必要経費だ。

それらを誰が負担するのか。

まだ自分には結婚資金としてのお金がある。

いや、それ以上の蓄えがあるのだ。

それを浩一も知っている。

「若菜・・・頼む、今回は・・・今回だけは、俺が何とか作るなんて、軽はずみな事言えないよ」

それはそうだろう。

北海道に居る今。

親の傍に居なくてはならない今。

浩二に何が出来るだろう。

しかし、その貯金を出してしまったたら、自分の夢が全て消えて行くのだ。

(ずっと抱いていた不安はこれだつたのかしら)

「分かったわ」という、一言がなかなか出なかつた。

どうしてなのか、どうしても簡単に譲れない様な気がしてならない。

(貴方のお母さんだから助けたい。でも、私は会つた事もない人)

(ならば、会つてから渡したらいいんじやないかしら)

(そうすればきっと納得できるわ)

「浩二、私そつちへ行くわ

「え？ 何だつて？」

浩二の声が冷たく響く。

(どうしたの？)

「だめだよ。こっちへ来て、どうするつもりだよ」

「お母さんに会いたいの」

「病床で苦しんでいるお袋にか？ 会つて何て言つただよ。俺の嫁さんだつて言うのか？」

「そうよ。そうすれば、お母さんも安心するでしょ」

「お前は、俺のお袋に早く死ねとも言つのか！ 安心させで、万が一の事があつたらどうしてくれるんだ！ 俺は・・・俺は・・・どうしたらいいんだ・・・」

冷淡に言葉を発したと思えば、喚き出す。

それは、まるで錯乱状態をながりだ。

(冗談じゃねえ。北海道になんか行かれてたまるかよ)

(何としても行かせねえ！)

「若菜、スマン。もういい……所詮、お前にとつたら他人だもん。俺にとつては、大事なお袋でも、お前には他人なんだよな。もういい……」

「浩……『めんなさい』。そんなつもりで言つたんじゃないわ」
(突き放されるのに弱いんだよ、女はさ)

浩一の口元が歪んだ。

「いや、分かったよ。もういい。結婚も考えさせてくれ」「浩一待つて！違うのよ！お金は送るから。送るから、お願ひ！」
「本当か？」

(そうよ、浩一は今、失意のどん底に居るのよ)

(私は何て酷い事を言つたの……)

(彼を救えるのは、私しかいないのに)

「ええ、明日にでも送るわ。いくら送ればいい？」

「ありがとう、若菜なら分かつてくれると思ったよ。そうだな、差し当たり100万だな」

又、冷淡な声だ。

感情の起伏が激しい。

それが、より一層浩一の失意を感じさせる。

「100万ね。分かったわ、明日振り込むから」

「若菜、お袋が退院するまで、俺はこっちにいるからな」

「……じゃあ……結婚式は」

「延期だな」

恐る恐る聞く若菜に対し、いつも簡単に言つてのける浩一。まるで、結婚式なんてどうでも良いと言いたげな口調だ。あれほど、一人で式場を見て回つて、時間を費やしたのに。

(浩一にとつては大した事じゃなかつたのかしら)

ふと、式場を選んでいた時、ドレスを選んでいた時の事が思い出される。

(浩一は、一度も口を挟まなかつた)

(どんなドレスを着ても、見もしなかった
(浩一ににとっては、どうでも良かったの?)

ケイタイから、通話が切れる音がした。

「あっ！」

まだ、話したい事があった気がして、声を出したのだが、電話から浩一の声は一度と聞こえて来なかつた。

第一十話 容態（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きを、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一十一話　間違い電話

電話を切ると、すぐに着信があった。

(何だよ、まだ何か言いたいのかよ)

面白く無さそうに、ディスプレーを開けて見た。
ところが、番号だけで名前が無い。

(何だ? 誰からだ?)

カモからの電話は、全て番号を登録してあるので、ディスプレーに表示されるのだ。

受話ボタンを押し耳に当てるとい、若い女の声が飛び込んで来た。
「お願い! もう、これ以上何も言わないから!」

「え?あの・・・

「あ・・・知也でしょ?」

(何だ? 間違え電話か?)

浩一は、近くにあつたベンチに腰掛けながら、ゆっくりと優しく話し出した。

「違いますよ。貴方のお探しの方ではありますんが、かなり切迫しているご様子ですね」

「まあ、お恥ずかしい・・・」めんなさい。彼が・・・

「・・・彼が、どうしました? 私でよければ、話を聞きましょうか?」

?

「え、でも」

女の戸惑いが伝わってくる。

それはそうだろう、間違い電話なら、「違いますよ」の一言で終わるものだ。

「かなり辛い思いをされている様に聞こえました。間違い電話も何かの縁でしょう。誰かに話せば、落ち着くという事もありますよ」

「ええ、でもお時間を取りさせては申し訳ありませんし」

「私ならちょうど時間が余って、どうしようかと考えていた矢先で

す

「そうですか。でも、電話でお話できる様な事でも無いので・・・」「だったらこうしませんか？貴女は、至つて聰明な方の様だ。もし、貴女と私の距離が近かつたら、食事でもしながらゆつくりと話をす。逆に、会える距離で無いなら、貴女も私もこの縁は無かつたものと考えて忘れる」

電話の向こうから、クスクスと可笑しそうな笑い声が聞こえて来た。

(おひ、こりや脈ありだな)

「可笑しな方ね」

「よく言われます」

「もし会つて、私がとても危険な女だったら、どうなさるの？」

「貴女が危険かどうかは、この電話で分かります。貴女は優しく思いやりのある女性だ。そして、私は決して危険な男ではない。これは、神に誓つて言えますよ」

(死神に誓つてなら、言えそうだな)

「そうね・・・これは新たな出会いの賭けかしり

「そう願いたいですね」

女は少し考へると、

「では、貴方はどこのところのかしり?」
と、聞いてきた。

「多分、貴女の近くですよ」

又、女が楽しそうに笑つた。

「そんな事は分かりませんわ」

「では、貴女はどこにいるのでしょうか?」

「私が先に言つたのでは、貴方が遠くても近いと言われたら、それまでですもの」

(なるほど、バカでは無い訳か)

「しかし、余りにも遠ければ、会いたくても会えないではないですか。同じ事ですよ」

「そうですね・・・それも、ありますけど」

「大丈夫ですよ、私には羽は無い。近くも無いのに、近いと書いて、飛んでいく事は出来ません」

「ふふふ・・・私は、Ｋ町にいます」

「これは!近いですね、20分で貴女の傍に行けますよ。会つてくれますね」

「本当ですか?もし、私が待つても貴方がいらっしゃらなかつたら、私はとんでもおバカさんになつてしまつわ」

「貴女を道化になんてしません。誓いますよ」

「では・・・」

女は以外にもあつさりと、待ち合わせの場所と時間を約束して來た。

(結構な遊び人か?)

(まあ、それならそれで、遊ばせて貰うけどな)

女は名を名乗ると電話を切つた。

女の名前は、藤野美里。

浩一は電話を切ると、Ｋ町へと足を向けた。

(藤野美里か・・・声はいいな)

(確か、男の名前を呼んでいたな)

(まあ、力モにならないまでも、いい女つて感じだぜ)

(今夜も又、楽しませてもらいましょうか)

浩一の肩が、可笑しそうに大きく波打つて動いた。

第一十一話　間違い電話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一十一話　待ち合わせ

待ち合わせの場所は駅から外れた商店街の路地に在った。その町に住んでいいる者でなければ、知る事も無いであろう、奥ゆかしすぎるほどの佇まいだ。

それを店だと言わなければ、誰も気が付かないだらう。ドアに掛かる【welcome】の文字。ドアを開けようとした時、女の声が背後から聞こえて来た。

「藤堂さんですね」

浩一は振り向くと、背後にいる女を見た。

女は、楽しそうに笑顔を振りまいている。

その姿は、均整の取れた体で痩せすぎても太りすぎてもいない。服装は、淡いピンクのスーツにシンプルなブラウスを嫌味なく着こなしている。

化粧も髪も、どこを取つても、浩一の趣味にぴったりと合つ。(こりゃー、掘り出し物だな)

年の頃は、30前後だろうか、笑うと多少の小じわが出るが、気にはならない。

女はもう一度同じ言葉を繰り返した。

「藤堂さんですね」

「藤野美里さんですね」

「ここは分かり辛いと思いまして、お待ちしておりましたの」美里が軽く会釈しながら、店のドアを開けた。

電話の声より、霸氣のある喋り方だ。

美里は自分から店の中に入つて行くと、

「ここで宜しいですか?」

と、壁際の席を指し示した。

「ああ、私はどこでも構いませんよ。床でもいいからです」

「まあ、さすがに床に座るのも困りますから」

美里は、口々口々と笑うとテーブルに着いた。

浩一もそれに随つてテーブルに着く。

ウエイトレスがメニューを持つてやって来た。

美里は、ケーキが美味しいのと言つてケーキと紅茶を注文している。

浩一も、同じ物を注文した。

「藤堂さんって、お電話よりお若くてビックリしました」

「いや、もうオジサンですよ。美里さん」お若くてビックリです。

こんなオジサンが相手で申し訳なかつた」

「嫌ですね。私だって、いろいろと経験を積んで、それなりの年齢

ですよ」

「そうですか、お若く見えるから、てっきり20代かと思いましたよ

「お上手ですね」

否定しながらも、嬉しそうに笑っている。

(経験を積んでか、どれほど経験を積んで来たのか、知りたいものだな)

「それで、さつきはございました? 私でよかつたら、聞きますよ」

「ああ、さつきの・・・大した話じやありませんのよ」

美里はお手拭を折り畳むように弄んでくる。

「気持ちがスッキリすれば、又話が弾むと思いますが、それとも、言いたくないかな」

「そういう訳じゃないんですよ。本当にくだらない話

美里はそう言いながらも、少しずつ話し出した。

「彼が出て行つたんです」

「一緒に暮らしていたんですか?」

「ええ、そんなに長い付き合いでないんですけど。一緒に暮らして、半年くらいでしょうか」

「半年ですか」

「急に、ギャンブルに嵌つてしまつて、借金を作つたらしくんです

「それは、いけないね」

「ええ、それを私に返済してくれと」

(おいおい、俺と同じかよ)

「それで貴女は」

「断りました。だつて、余りにも自分勝手で。言い様があると思うんですよ。ちゃんと話してくれれば私だつて協力しない訳じゃなかつたけど」

「そうでしたか。それで、彼が怒つて出て行つたという事ですか」

「ええ、くだらない話ですね」

「いや、貴女達にとつては大変な問題だ」

「もういいんです。そういう人だつたと諦めますから。それに・・・」

「美里が、ウエイトレスの運んできたケーキにフォークをさして口元まで運ぶ。

「それに、何ですか?」

「彼が出て行つたお陰で、藤堂さんに会えたわ」

そう言つてケーキを一口、口に入れた。

いかにも、美味しいと言いたげな笑顔だ。

(こいつは、俺を誘つてるのか?)

(面白い、乗つてやるか)

浩一も、同じように一口食べてみる。

あまり、甘い物は好きではないが、その場の雰囲気といつものがある。

女を自分のものにするには、雰囲気を大切にしなくてはならない。

(女はムードが大事なのさ)

「これから、どうするんですか?」

「どうつておつしやると?」

「時間があるのなら、少しあ相手をお願いしたいと思いまして」

「相手?」

「ええ、これから映画でも見よつと思つたのですが、一人で見るの

も味気無いものです。貴女の様な綺麗な女性を見る事が出来たら、
さぞ楽しいだろ？と思いましてね」

「あら、綺麗だなんて」

「そして、夕食と一緒にどうでしょ？」

「・・・」

「夜景を眺めながら弾き語りが聞ける、落ち着いたレストランがあ
るので、貴女と行けたら楽しいだろ？と思いましてね」

「ステキだわ」

美里の目が輝いた。

浩一はそれを見逃さなかつた。

「一人で部屋へ帰つても、寂しいだけでしょう。彼が居ない今夜は
誰かと一緒に居た方が良いのじゃありませんか」

美里はケーキを食べながら、考えている様子だ。

これ以上押しては駄目な事は経験で分かつている。

押し過ぎれば獲物は逃げて行く。

二人の間にしばしの沈黙が流れた。

そろそろ、頃合と見た浩一は最後の詰めに出る。

「どうやら私は、貴女に無理強いをしているらしい」

「いえ、そんなこと」

「貴女が一人、部屋で寂しい思いをされるのは私も辛い。しかし、
貴女が望まない事を勧めても仕方がありません。今日は、これまで
にして気が向いたら電話をください」

そういうと、名刺にケイタイ番号を書いてテーブルに置いた。
美里は、テーブルの上の名刺に目を落とした。

名刺には、【ファッションコンサルタント 代表取締役社長 藤
堂 浩】とある。

「ファッションコンサルタントをされているんですね。しかも社長
さん！」

（食いついて来たな）

「いや、大した事はありません。コンサルタントと言つても、小さ

な会社です

「どのくらいの社員さんを抱えていらっしゃるんですか？」

「そうですね、ざつと50人程度でしょうか？」

「そんなにたくさん?」

浩一は、大した事は無いと言いながら、ゆつくりと頷いて見せた。とはいって、ファッションコンサルタントが、どんな仕事をして、本来どの程度の社員が居るものなのか、まるで理解していないのだ。この手の女なら、こういった肩書きが効き目があるだろ?といふ、その程度の名刺だ。

その他にも、名刺の種類は多い。

「一日で女の性格を見抜き、好みそうな肩書きを出してやるのだ。案の定、美里の態度が一変した。

「凄いですね。だから、こんな昼間に時間があるのね」
そう言いながら、笑顔がさつきまでどこか違っている。

「まあ、確かにこんな時間にふらふらしてるのは、可笑しいですね」「どこか気品がありだから、変な人だとは思いませんでしたけど、社長さんは思わなかつたわ。あら、『ごめんなさい』

「いや、そうでしょうとも。私位の社長なら、掃いて捨てる程いますから」

「でも、大概の社長さんは、忙しそうにしてますよね。接待だとか、会合だとか」

「そうですね。しかし、私の会社は部下がしつかりしているので、社長が動く事はほとんどありません」

「そなんですか」

「私は働くのが嫌いなんですよ」

そう言つて、ウインクして見せた。

「まあ、そんな事をおっしゃって」

そう言いながら、美里はけらけらと笑つて見せた。

「では、私の素性も分かつた所で、いかがですか?もう一度お誘いしても宜しいですか?」

「私からも聞いて宜しいかしら?」

「何でしちう?」

「藤堂さんは、『結婚されているのですか? それとも、婚約中とか?』

「それは、どうこう」とぞしょつか?」

「失礼とは思いますが、このままでは、本氣で好きになってしまつかもしれません。そうなつてから、妻がいますなんて言われたら、私は立ち直れませんわ。それなら、今はつきりさせておきたいの」「ほう、思った以上にしつかりした方だ。私には、妻はいませんよ」「では、婚約されている方は?」

「いません」

「恋人は?」

「いません」

「本当に? 嘘ではありますんのね」

「貴女に嘘を言いたくはない」

「そうですか、ありがとうございます」

「お互い大人ですから、これが本氣の恋に発展しても可笑しくは無い。そう思つても宜しいのですね」

「ええ、勿論です」

(「イツはいいや、自分から飛び込んできやがつた。結局は肩書きだよな)

浩一の田には、服を脱ぎ捨て、淫らに狂う美里が写っていた。

「では、今夜はすつと一緒にいてくれますか?」

直球だ。

「この手の女は、回りくどいやり方を嫌う。

美里は、浩一をじつと見つめ、名刺をバックへしまつと「イツコトと微笑み、

「今夜は、気分が乗りませんわ。後で、お電話を差し上げても宜しいかしら。その時は、大人のお付き合いを楽しみにしていますわ」と、告げた。

浩一は、悔しさを胸の奥底にしまつて、同じみづれーしつと微笑み頷いて見せた。

「勿論です。その時は、貴女を離しませんよ」

浩一が、美里の手を握った。

美里も浩一の手を握り返した。

（初日でなかつたら引き寄せて、キスの一つもする所だ）

（クソッ、今夜はこの女で楽しめると思つたのに、残念だな）

（まあ、すぐに俺の物になるだろうがね）

浩一はゆっくりと手を離すと、「貴女に先に行かれるのは寂しいので、私から先に出ても構わないでしょうか」「言つとい、伝票を手に取り出口へと向かつた。

美里は、浩一の背中をじっと見つめていた。

第一十一話 待ち合わせ（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第一二三話 暴露

若菜は通帳を眺めていた。

残りは、400万。

結婚資金として、確保していたお金だが、浩一の母親の病氣に使わねばならない。

この全てを使つてしまつたら、結婚式も新婚旅行も霧の中に消えてしまつ。

それでも仕方が無い事なのだと、自分に言い聞かせてみるが、どうしても自分自身を納得させる事が出来ない。

「若菜！」

余程集中していたのか、飛び跳ねる程驚いた。

「何をそんなに驚いてるの？しかも給湯室に籠つて」

そうだ、仕事を終え営業所に帰つて来たが、さつきから通帳と睨めっこしたままなのだ。

「コーヒー淹れに来たのか、通帳を眺めに来たのか、分からぬ

「未来・・・」

「どうしたの？そんな顔して」

「コーヒーを淹れながら、若菜を見ると、通帳を口元に当て泣きそうになつていて。

「又、何かあつたのね？！」

「それが・・・彼のお母さんが、心臓病で、手術だつて」

「ふうん、保険は」

「入つてないつて」

「あら、」

「それで、お金が必要だつて言ひのよ」

「いくら」

「とりあえず、100万」

「ふうん。で、出してあげるの？」

「しょうがないよね。彼のお母さんだし、手術しなくちゃならないつて、電話の向こうで泣くのよ」

「でも、若菜としては、納得がいかないんだ」

「うん」

「若菜も気が付いてるんじゃない？」

「何が？」

未来が、じつと若菜を見つめた。

そこへ、後輩が入つて來た。

「あら、邪魔になっちゃうね。『ごめん』ごめん、若菜帰ります」

未来が若菜を押して、給湯室から出ると、「話があるから、若菜の部屋へ行くわ」と言つた。

未来も言わさない言い方だ。

余程の事が無い限り、未来がこんな言い方はしない。「うなると、どちらが年上か分からなくなる。

未来と共に、若菜のアパートへ帰つて來た。

部屋の中は寒々しい。

どんなに明るい季節が来ようとも、主人が泣き虫だと部屋まで輝きを失つてしまう。

部屋の明かりを点け、買つてきたビールをテーブルに置く。

二人の密談の始まりだ。

淡いピンクのスーツのジャケットを脱ぎ、シンプルなブラウス姿になる。

手首のボタンを外し、一つ一つめぐり上げ、ビールを手にする。プシュっと音を立て、ビールの開く音がする。

若菜と未来のビールが、宙でぶつかる。

「で、さつき気が付いてるって言つてたけど」

若菜が口火を切る。

ビールを口にしながら、未来が横目で若菜を見た。

「どういつ事?」

ビールの缶を口から離し、口元を拭う。

「これを聞いたら分かるかな」

「そう言つて、ペンをテーブルに置いた。

「聞くつて、ペンじやない」

「最新兵器だよ。」これ、録音機

そう言つと、何やら操作し始める。

「従来の録音機だと人前に出しておくと、いかにも録音しますって感じでしょ。最近は、こういう便利なアイテムがあるのよ。これなら、テーブルに置いておいても変じやないしね。バックに差しておいても、ポケットでも変じやないでしょ」

「なるほどねえ」

「感心していられるのは、今のうちだと思つけどね。はい、始めるよ」

ペンをテーブルに置くと、何やら声が聞こえて来た。

それは、聞き覚えのある男性の声だ。

じつと聞いていると、浩一の声と同じだという事が分かる。

「これつて・・・」

未来がしつかりと頷く。

会話の内容は、完全に相手を口説いている。

会話の最後には、はつきりと妻も婚約者も恋人もいないと宣言している。

そして、次に会った時には、大人の時間を楽しもうと。

それが何を意味しているかは、誰に説明を受けなくとも分かる。

「まさか・・・だつて・・・どうして?」

「その、まさかよ」

「相手は?彼が話してる相手は?」

「私よ」

「未来がどうして?..」

録音機を止め、名刺をバックから取り出した。

「ずっと変だと思っていたのよ。だから、何とかして若菜の田を覚まさせたかったけど、完全に突っ走ってたでしょ。どうしようもなくてさ、しょうがないから、巡回検査したのよ」

「どうやって彼と知り合ったの？」

「簡単よ、若菜のケイタイから番号をもらつて、間違い電話を装つて掛けたの。簡単に引っかかるてくれたわよ。すぐに、会こましょうつて事になつてね」

「そんな・・・じゃあ、彼は東京に居るつて事？」

「これが彼の筆跡なら、そんなんじゃない？」

若菜は、名刺を手にした。

【ファッションコンサルタント 代表取締役社長 藤堂 浩】

「名前が違うわ・・・」

「当たり前でしょ。詐欺師なんだから」

「決めて掛からないでよ」

名刺を裏返してみると、確かに見た事のある筆跡が並んでいる。更にその数字は、間違いなく浩一のケイタイ番号だ。

「若菜は騙されてるのよ」

3本目のビールを開けながら、未来が言つ。

「この状態で、よく飲めるわね」

「素面で人の恋路を邪魔できますか！」

「でも、でもやっぱり信じられない！」

「そういうと思った。じゃこれ」

次に出されたのは、ケイタイで撮つた写真だ。

店なのか、民家なのか分からぬが、建物の前に男性が立つている。

その男性の写真が数枚。

そして、最後の写真はしっかりと顔を写していた。

「それ、浩一さんでしょ」

ここまで来たら否定は出来ない。

確かに、そこに写っているのは間違いなく浩一なのだから。

若菜は訳が分からぬと言ったそうに、ケイタイをテーブルに置いた。

「これ……どうやって、撮ったの？」

「待ち合わせの場所に現れるのを待つてたのよ、隠れて」

「性格悪い……それで？」

「人の性格を言えるの？ それで、隠れて撮ったの」

「顔、モロ撮ってるじゃない」

「浩一さんの前に姿を現した時に、ケイタイを自分の顔に近づけて撮ったの」

と言いながら、ケイタイを自分の顔に近づけてボタンを押す。画像を見ると、確かに若菜の顔が撮れているのだ。

「簡単よ、こんなの。カメラを相手に向けてても、ケイタイだと思うから、相手は疑わないでしょ」

「じゃあ、じゃあ彼は北海道ではなくて、ここにいるところ事？」

「そうなるね」

ケイタイをビールに持ち替えて、さうりと呟いてのける。

「彼が今まで言っていたのは、全部嘘だったと？」

「でしょうね」

「彼は詐欺師だったと？」

「そういうことだね」

スルメを齧りながら、未来が相槌を打つ。

「これって、何の詐欺になるわけ？」

「結婚詐欺」

「私は詐欺に遭っていたという事？」

「そうなるね」

「そんな・・・そんな・・・浩一がそんな事・・・。」

あまりのショックに、手が震えてくる。

そんな事ある筈がないと思いながらも、そつかも知れないという気がする。

いや、最初から可笑しいとは思っていたのだ。

いくら何でも、余りにも昔と違い過ぎた。

例え18年とは言え、人間があんなにも変わる筈は無いのだ。しかし、若菜の中には『変わる人だつている筈だ』といつ思いがある。まして、愛し合つた昔の恋人ならば尙更の事だ。

変わつていて欲しかつた。

自分が愛した男だからこそ、あの頃を後悔して変わつていて欲しかつたのだ。

だが、出会いから1年が過ぎようとしている今、解せない事も多々あつた。

結婚式場を見て回つても、『デートをしていても、浩一は1円の金も出さなかつた。

自分はお金が無いからと、事ある毎に若菜に言つてきたのだ。

『済まない』『申し訳ない』『必ず返すから』そう言いながら、『部下を飲みに連れて行きたいから、5万貸してくれ』『背広を新調しないとならないから、10万貸してくれ』と用立てる事が多くなつてきていた。

それに対し不満な顔をすると、必ず返すと繰り返すか、結婚したら俺の稼いだ金は全て若菜のものになるのだから良いだろう、と切れ氣味に不貞腐れる。

そんな時、やっぱり変わつていかないのかも知れないという想いが過ぎる。

自分は大変な間違いを犯そうとしているのかもしれない、不安が首をもたげる。

だが、40歳だ。

いや、41歳を迎えてしまつているのだ。

友達にも招待状を出している。今更、結婚式を止める等などいつて言えよつ。

こんな事は、結婚してしまえば笑い話に転じてしまうのだと自分に言い聞かせて来た様な気がする。

手の震えが止まらない。

未来がビールを口にしながらも、若菜の様子を窺っているのが分かれるが、今の若菜にはどうする事も出来ないのだった。

「四十女が結婚に焦つて詐欺に遭う。

新聞やＴＶでは見知っていた事、それがまさか自分の身に起こる筈は無かつたのだ。

「無かつた。

いや、あつてはならなかつたのだ。

「・・・。

きつと、薄々分かつっていたのだろう。

分かつていながらも、分かりたく無かつたのだ。

昔の恋人だからこそ、溺れたかつたのかもしねりない。
「で、いくら騙されたんだっけ」

「七十万・・・強」

「強つて、プラスアルファがあつたんだ」

若菜が力なく頷く。

「痛かつたね」

「痛いどころか・・・」

若菜はまだ信じられないと言いたげに、ビールを手にすると、グビグビと飲み干した。

未来はスルメを呑えたまま、新しいビールのプルタブを押し開け、若菜に差し出した。

「若菜、とりあえず飲んで、酔いつぶれ。目が覚めたら、反撃だからね！」

まだ信じられないが、信じるしかないのだ。

信じるしかない事実。

だが、もしかしたら、これは未来の作り話かもしれないという、はない期待が首を出す。

全てがビールで流れてくれればとばかりに、次々にビールを煽つて行つた。

(眠れない・・・)

いくら飲んでも眠くならない。

未来はとっくに酔いつぶれて、眠りの世界へと入ってしまっている。

しかし、可笑しな事に若菜は全く眠れなかつた。
いくら飲んでも酔いすら来ない状態だ。

(変な夜だな・・・)

こんな事は初めてだ。飲めば必ず眠気が来る。いつの間にか眠ってしまうというのが、いつものパターンなのだ。

それが、今夜は全く眠くならない。

若菜はゆっくりと立ち上がり、風呂場へと足を向けた。
シャワーを浴びれば、又違つてくるのではないかと考えたのだ。
浴室の明かりを点け、ブラウスのボタンを外す。
意識はしつかりしているのに、どういう訳かボタンが上手く外れない。

(変ね、酔つてないつもりでもやつぱり酔つてるのかしら)

更に、ボタンを外そうと懸命になるが、どうした事か外れない。
ならば、他のボタンから外せば良いのだが、若菜は執拗に一つのボタンだけを外そうと指先に力を入れた。しかし、何をどうしても外れない。

「どうして外れないの!」

思わずイラついた言葉が口を突いて出た。それと同時に思いもかけず、涙がこぼれた。
「あれ? どうして涙が出るのかしら・・・あはは、変ね。涙腺が壊れたのかしら」

一度堰を切つて流れ出した涙は、止める事出来ない。

足の力が抜け、その場に座り込む形となり、それでも震える指はボタンと格闘を続けているのだ。

それはまるで、自分の心と体を引き裂いていくように見え

る。

声を出すまいと顎を噛み締めていたのが、いつの間にか嗚咽が漏れ、気が付かぬ間にわあわあと泣き出していた。

もう、何も考えられない。

一体、自分はどうして泣いているのか、それすら分からずに泣き続けた。

体中の涙が流れ出て、浩一の記憶まで流れてくれる事を祈るつ

に泣き続けた。

深夜の浴室に若菜の泣き声が木霊していた。

第一二三話 暴露（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】と
願いします

第一十四話 作戦会議

翌日は酷い頭痛に見舞われた。

それでも、目が覚めたのが不思議な位だ。

未来も又、酷い頭痛とムカつきで、トイレに駆け込んでいた。

「久しぶりに、一日酔いになつたわね」

「今日が休日で良かった」

「本当・・・こんな酷いの、久しぶりだわ」

「記憶が無いんだよね、どの辺からどうなつたのか」

「そうだね。ガンガン煽っちゃつたから」

若菜は冷たいタオルで、顔を冷やしながら頷いた。

未来はソファーに横になつている。

昨夜は風呂場で久しぶりに泣いた。

それも、子供のように大声で泣いたのだ。

しばらく浴室で泣き、何かが心の中からストンと剥がれ落ちた様な気がした。

すると、気分が楽になりやつとボタンが外れたのだ。

自分でもあの時の事が不思議でならない。

不思議でならないながらも、そんな事もあると思つていた。

不思議ついでに一日酔いも無ければ良かつたのだが、逆に途中シヤワーまで浴びたというのにしつかりと一日酔いに見舞われている。
(これが恋の後遺症・・・だったりして)

我ながらくだらないとは思うものの、そんな事でも考えていない
とぐるぐると目が回ってしまうのだ。

テーブルの上は、タベのままの状態で、空気を入れ替えなければ、アルコールの匂いが充満している。お陰で、余計に気分が悪くなる。

若菜は、這うように窓へとにじり寄つた。

窓を開けると、外の空気が二人の肺を爽やかにしてくれる。

大きく外気を吸い、吐き出す。

吐き出しながら、浩一への想いを断ち切らつとしている様に見える。

「で？ どうする？」

未来がソファーに座り直すと、若菜に声を掛けた。
窓に寄り掛かりながら、外を眺めていた若菜が振り返る。

「どうするって……」

「詐欺師をじうするかよ」

「まだ……信じられないんだよね……完全には」

そうだ、どんなに涙で流した筈の恋でも、ボタンが外れた様に剥がれ落ちた恋心でも、やはりどこかに引っかかっている様な気がする。

タベ大声で泣いて、全てが剥がれた筈の想いが、少しだけ引っかかりぶる下がつていてる様な気がするのだ。どうして、自分はこんなに女らしいのだろうと悲しくなつてくる。

「そりやねえ。結婚詐欺にあつた人は、よつぱりでないと信じられないだろうけど」

「だつて、そうかもしけないとは思つんだけど」

「そうじやないで欲しい」

「うん……だつて、結婚式場まで決めたんだよ」

「それが手だつてば」

「分かつてる」

又外へと顔を向ける。

休日も昼近い時間だ、外からは美味しそうな匂いが漂つてくる。

「料理か……」

「料理がどうかした？」

若菜がゆつくりと首を振る。

「何でもない。何でもないけど……」

白いレースのカーテン。

白いエプロン。

フライパン、フライ返し。

(浩一「田玉焼きと玉子焼きどっちがいい?」)

新聞を読んでいた浩一が顔を上げて笑う。

もうすぐ、現実になる筈の夢だつた。

しばらくすると、若菜が大きくため息を吐き、「よし!」と大声を上げた。

「どうしたのよ、急に!」

未来が驚いて若菜を見る。

「うじうじしたつてしまふが無いって事よ! 何となく、分かってい

た様な気がするんだから

「何が?」

「浩一の事。詐欺とは思わなかつたけど、やつぱり、現実とも違つよなつて」

「さすが、伊達に年齢を重ねた訳じゃないか」

「そうだね」

一人が同時に笑つた。

「じゃあ、作戦会議と行きますか!」

「どうせなら、徹底的に。一度と復活出来ない様な、そんな方法がいいわ!」

開き直つた女ほど怖いものは無い。

二人はテーブルの上を片付けながら、ビツヤツたら徹底的に叩きのめせるかという作戦会議を開始したのだ。

「他にも騙されてる女性がいると思うんだよね

「それをどうやって探す?」

「奴のケイタイに電話番号が入つてるよね、きっと

「多分ね、でもそれをどうやって調べる?」

「そうだよね」

「彼がケイタイを手放す時は・・・」

「シャワーを浴びてる時だ」

一人が顔を見合わせる。

シャワーを浴びるという事は、その先の危険があるという事だ。

「彼は、私には触ろうともしないわよ」

若菜がムカつきながら言葉を放つ。

「ええ！ 私？ やだよ」

未来が大仰に首を左右に振る。

いくら巡回検査をしたとはいって、そこまでは「免」といふつもりたい。

「だよね」

ちょっと、ほっとしながらも残念そうにため息を吐く。

「ほつとしてるような、残念な様な、どしどしよー。」

「複雑な女心です」

二人同時に噴出してしまった。

結局、ケイタイを調べるという事は、危険が伴なうという事で話が落ち着いたのだった。

本来なら、同類を集めて逃げられない様にするというのが一番なのだろう。

TVドラマ等でもこいつた詐欺師に対する攻撃は、被害者の女性が男を袋叩きにすると、相場は決まっている。

しかし、ドラマと現実は違うのだ。

「場面は変わって、被害者が勢ぞろい、何てね
あるはずがないのだ。

結局、何をどう言つても、浩一は逃げるに決まっているのだ。

「そこをどう抑えるか、だね」

「そうだね・・・」

テーブルに肘を突き、カーテンが揺れるのを見つめている。
台所には、昨夜の残骸が山の様に積まれているのだ。

両者どちらも、洗う元気は無さそうだ。

いくら考えても名案が浮かばないまま、時間がかりが過ぎていく。
浮かんで来るのは、冗談なのか夢想なのか、ドラマの様な展開ばかりだ。

結局一人が決めたストーリーは、囮のドライブという事で、話が纏まつたのだつた。

第一十四話 作戦会議（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続編は、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一一十五話 テートの誘い

二人は、未来の部屋で顔を付き合わせていた。

入念に計画を練り、詳細を書き留めたメモを未来に渡した。
未来がメモを手にして、じっくりと読み返している。

ドライブに誘うにも、若菜では誘いに乗る筆が無いという事で、
未来が再度囮を引き受ける事になった。

元来、楽しい事をとことん楽しむ性格の未来は、女優になつたつ
もりで受話器を握った。

「もしもし」

すぐさま浩一が電話に出た。

未来は、若菜にウインクして見せた。

「藤堂さんのケイタイですか？」

「ああ、先日はありがとうございました。楽しかったよ」

「まあ、覚えていてくれたんですね。嬉しいです」

「勿論覚えていますよ。貴方の様な美人を忘れる訳がない」

電話から漏れる声は、確かに浩一だ。

若菜は、分かっていた事とはいえ、やはり現実を突きつけられた
様で、悔しさと哀しさが込み上げてくる。

「次はお食事に誘つてくださいって、おっしゃっていたから電話しました」

「それは嬉しいな。じゃあ、今夜でもどうですか？」

「残念だわ。今夜は用事がありまして・・・」

「そうですか、さすがに今夜は無理ですか」

浩一の優しい声音が未来のやる気を一層引き起こす。

未来の目が若菜を捕らえる。

その目は、化けの皮を剥がしてやるからね、と語っている。

「でも、今夜はダメですが、次の休みにどうかと思いまして

「次の休みですか？そうですねえ」「しばしの間が空く。

考へている風を装つてゐるのか、本当に予定があるのか？

「2日後の土曜ですか？」

「ええ、それまでは仕事がありますから」

「そうでしょうとも」

浩一の笑い声が響く。

「いや、社長をやつてると曜田の感覚が無くなってしまって、失礼しました」

「社長さんって、いつも忙しいですねものね」

「いや、そういう事じゃないんですね」

「それで、いかがですか？できれば、ご一緒にドライブなんてステキだと思うんですけど」

「ドライブですか、いいですね」

「ご一緒したい所があるんですね」

「ほう、それはどこでしようか？」

「とても景色の綺麗な所なんですよ。是非、藤堂さんと一緒に一緒したくて」

「そういう事でしたら、ご一緒致しましょ」

「まあ！嬉しい！」

未来が大きな声で喜んでみせる。

「貴方は明るい人だ」

「よく、言われます。それで、当口の時間ですが」

未来が予め用意しておいたメモを見ながら、時間を指定する。

浩一が快諾して電話が切れた。

ケイタイを切ると、未来が若菜を見た。

「本当にあの人、ここに居るのね」

若菜が頬に手を当てて、ため息を付いた。

「だから、全部嘘だつたんだよ」

未来が、メモをテーブルに置きながら、若菜に言った。

「分かつてゐる。分かつてゐるけど」

分かつてはいるが、どうしても事実であつて欲しく無いといひ、

哀れな女心だ。

「とにかく、デートの取り付けはしたからね。次だよー。」

二人は、2日後の『デート』の用意を始めた。

「出来るだけ、悩殺スタイルがいいよね」

「悩殺って言つたつて、そんな服持つて無いよ」

「だから、できるだけよ」

「この間は、どんなのを着て行つたの？」

「スース」

「じゃあ、イメージをガラツと変えて・・・」いろんなのはどう?」

未来の洋服ダンスを勝手に開けて、若菜が洋服を物色して、出して来たのは。

「ミニスカートじゃない」

「自分のでしょ」

「これ、スラックス履く奴だよ」

「下にタイトスカート穿いたら?勿論、マリード」

「完全に楽しんでるでしょ!」

「やるからには、徹底的に!」

未来がげんなりした顔で、洋服を見ている。

その顔が可笑しくて、若菜は笑い転げている。

「ちょっと!私にも年齢というものがね」

「大丈夫よ、若く見えるから」

結局無難な所で、未来が選ぶ事になった。

多少、若菜の思つ所とは違つたが、それでもデートに漕ぎ着けているのだから、そこまで気を遣う必要も無いだろ?という事で妥協したのだ。

アクセサリーを選び、髪型をどうするかと相談が続く。

口紅は派手な方が良いなど、まるで初デートを楽しみにしている女子高生のようだ。

実行まで、あと2日。

二人は、浩一を叩きのめすといつ妄想を着に、ビール缶を手にしたのだつた。

第一十五話 テートの誘い（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一十六話 テートの朝

当日の朝は、雲ひとつ無い晴天だった。

「ドライブ日和だわ」

空を仰ぎながら、若菜が楽しそうに口を開いた。

未来は、若かりし頃の洋服をアレンジして着こなしている。
「やっぱり、いつもより若く見えるわよ」

「元々、若いのよ」

「そうね、そういう事にしておくわ」

そう言いながら、用意しておいたポットを未来に差し出した。

「これ、私の特性」「一ヒーよ。浩一に飲ませてあげて」

「そんなの作ってあげたの?」

「そうよ、これは特別だから、未来は飲まないでよ」

「どう特別なのよ」

「下剤入りよ」

「じゃあ、運転中に飲ませたら・・・」

「運転を誤つてしまふかもね」

未来が、ポットをじっと見つめている。

「かなり強烈だから、現地について景色でも眺めながら、車の中でも
ゆっくりと飲ませてよ。トイレも無いしね」

「悲惨だ」

「どうせなら、楽しまなくちゃね」

若菜がワインクして見せた。

「じゃ、私は一足先に現場に行つてるから。後は宜しくね」

「はいはい、楽しいドライブをしてきますよ」

「ちゃんと、録音しててよ」

「分かつてますつて」

未来が、ポットをバックに押し込むのを確認して、若菜が車のキーを手にした。

「浩一は迎えに来るんでしょう？」

「そうよ。この先のコンビニまでね」

「私の時は、駅前の通りだつたのよ」

「メントできない事言わないでよ」

「悔しいだけよ。でも、その悔しさも今日までだけね」

若菜の目がキラッと光った。

車の中に激しい音楽が流れる。

あの日若菜と未来が出した結論は、以外にも単純な作戦だつた。未来がデータに誘い、浩一との会話を全て録音するのだ。

勿論、できるだけ証拠が集まる様に話を持つしていく。

この辺は未来の営業テクニックに頼らざるを得ない所だ。その録音を警察へ持つて行く。

これだけで警察が動いてくれるとは思わないが、やつてみなければ先へ進まないのだ。

警察がどう出るか。

果たして動いてくれるのかどうか？

それは、若菜にも未来にも未知の世界だ。

若菜は流れる景色に田をやりながらため息を付いた。ハンドルを握る手に力が入る。

今更ながら、浩一が結婚詐欺師であつて欲しく無いと思つているのだ。

それでいながら、今までの浩一の言動や行動を思い出せば、それは疑い様が無い。

未来にこんな事を言えば、「女心だね」と一笑されるのは分かり切つてている。

いや、若菜自身浩一が嘘を付いている事は薄々分かっていたのだ。分かつていながらも、信じたかった。

昔のように、熱く燃えたかったのかかもしれない。

年齢を重ね、もう燃える事など無いと諦めていた人生に、浩一とい

う光明を見たのかかもしれない。

ハンドルをグッと右へ向ける。

減速と同時に車体がカーブする。

そして加速。

全てを吹っ切る為に、若菜の車がスピードを上げている様に見える。

スピードと共に浩一への思いを捨てる。

(浩一、最後のドライブよ!)

全ての景色が流れ、溶けて行く・・・。

溶けていく景色をぼんやりと眺めながら、未来はバックに忍ばせたペン型録音機のスイッチを入れた。膝の上に置かれたバックから、ペンの頭部分だけが露出しているが、誰が見ても決してそれが録音機であるとは分からぬだろう。

浩一も同様、未来のバックに目を向ける事すらない。

自然の中の不自然。

不自然の中の自然。

駐車場から車が発進した時から、未来と浩一の二人つきりの時間が動き出した。

浩一はさも楽しいと言いたげに笑って見せる。

未来は、浩一に会えた嬉しさを伝え、どれほど浩一に惚れ込んでいるかと語った。

それは、一人が出会った事が自然であり、結ばれる運命であるかの様に語り続けられた。

浩一も又、未来に出会えた運命を神に感謝すると大仰に口にして見せた。

しかし、二人の役者の心の内は、全く別の所にある。

未来の携帯が鳴る。

「あ、ごめんなさい。メールだわ」

「いいよ、私は気にしないから」

「優しいのね」

メールを開くと若菜からだつた。

『順調?』

『かなりね』

『お金の話が出てきそう?』

『最初のデートでそれは無理なんじゃない?』

『頑張つてよ!』

『分かつてるけどね』

(分かつてるけど最初からそんな話にはならないでしょう)

未来がため息を付きながら携帯をバックへ戻すと、浩一が笑いながら話しかけてきた。

「どうしたんだい?」

「ああ、友達なんですけど。お金に困ってる子で、貸して欲しいって言つんですよ」

「ほう、どの位貸して欲しいって言つの?」

「50万あればいいしちゃけど」

「50万とは大きいね」

「ええ、借金があるとかつて、可哀想だから貸してあげてもいいんだけど」

「貸すって、そんな大金を持つてるのかい?」

「ああ・・・言いませんでした? 私の父、会社を経営していくお金の事ならいくらでも大丈夫なんです。私には甘いから」

「・・・そうだったの」

浩一の目が光った。

隣に座っている未来に、浩一の鋭い感覚が伝わって来た。

(乗ってきた!)

「以前にも、お金が無くて困ってる友達に100万貸してあげたん

だけど、未だに返してくれないわ」

笑つて見せる。

「それは酷いね。お父さんに怒られるんじゃないの？」

「あら、どうして？怒らないわ。困っている人がいたら助けてあげるのは当たり前じゃない？」

「・・・」

「浩さんも社長さんだから、私の父と同じ気持ちでしょ？」

「社長だからか」

浩一が可笑しそうに大きな声で笑つて見せた。

「私は、そんなに大金を動かせる程の社長じゃないよ」

「そうなのかしら？」

「君はお嬢さんだから、分からぬだろうけどね。社長にもいろいろあるんだよ」

「そうなの？」

「それじゃあ、君は豪邸に住んでいるのかな？」

「いいえ、一人よ」

「どうしてだい？」

「親元を離れるのも勉強でしょ？」

浩一が更に笑う。

「どうして笑うのかしら？」

未来が小首を傾げてみせる。

「いや・・・そうだね。一人で暮らすっていうのは大事な事だね」
(そうだよ、大事な事さ。一人なら、どんな状況でも作れるからな)
(ええ、そうよ。早く食いついていらっしゃい！)

浩一の手が未来の手を握つて来た。

その手は大きく未来を包み込もうとしているように感じる筈だ。
だが未来は、何人もの女を泣かせ、苦しませたその手に嫌悪を感じていたのだった。

「今夜はずつと一緒に居られると嬉しいのだが、どうかな？」

「嬉しい！私もそう思つっていたの！」

「二〇歳で、君のような可愛らしい人と出会えるなんて、私の人生に拍手を送りたいくらいだよ」

「年齢なんて関係ないわ。好きになる時は魔法が掛かつたように時間が止まるんですもの」

「魔法か！じゃあ、その魔法で私も若返る事ができるかな？」

「貴方は今でも若いわ」

浩一が未来に目を向けて微笑んで見せた。

未来が浩一の顔に笑みを返す。

まるで、未来永劫愛し合う事を約束している様に、二人の演技が続く。

二人の心の声があ互いに聞こえたなら、未来は爆笑し、浩一は愕然とした事だろう。

残念ながら、二人の心の声があ互いの耳に木霊する事は無かつたが。

未来はバツクに目を落とした。

(二〇歳の会話、本当に若菜に聞かせていいのかしら・・・)

第一十六話 テーブルの朝（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

第一十七話 ハーフィーの味

目の前が急に開け、崖の先に海が見渡せる。

車の窓を開けると潮風が車内いっぱいに入り込んできた。

「この景色が好きなの！」

未来が嬉しそうに叫んで見せた。

「海が見たかったの？」

「そう、海が好きなの」

「外に出てみるかい？」

「ええ、少し散歩したいわ」

二人が車から降り、崖に近付く姿を離れた所から若菜が凝視していた。

今一人が立つ崖が飛び降り自殺で有名な場所である事は、ネットで調べて知っていたのだ。

若菜の口元が歪んだ。

ちょっととした弾みで何が起るか、それは誰にも分からないのだから。

「ロープが張つてあるね」

ロープのそばに『立ち入り禁止』の立て札。

「どうしてかしら？ 以前はこんなのが無かつたのに」

「危険だからだろうね。足を滑らせたら、ひとたまりも無さそうだからね」

「残念ね、もう少し先まで行つて崖の下を見たかったのに」本当に残念そうに未来が前を見据えた。

「仕方ないね。景色の良い所なら他にも知つてているけど、行つてみるかい？」

「そうねえ・・・もう少し、ここに居たいわ」

「君がそうしたいなら、私は構わないよ」

「そうだ！ 私、ハーフィーを作つて来たのよ。飲むかしら？」

「それはありがたい。じゃあ、コーヒーを飲みながらゆっくりと海を眺める事にしようか」

二人は車に戻ると、若菜に渡されたポットを手にした。
蓋を開け、カップに注ぐとコーヒーの芳しい香りが鼻腔をくすぐる。

「いい匂いだね」

「特性のコーヒーなのよ」

「それは嬉しいね。君が淹れてくれたのかい？」

「ええ、勿論よ。貴方の事を考えながら淹れたわ」

未来の手からカップを受け取ると、ゆっくりと口を付けた。
ほろ苦さが口中に広がり、微妙な刺激が残る。

「何という豆かな？」

「さあ？ 何だったかしら。いろいろと混ぜたから、分からないわ」
肩をすぼませながら、未来が口を尖らせる。

「不味かつたかしら？」

「いや、微妙に刺激が残るなと思つただけだよ」

「いろいろ混ぜたのがいけなかつたかしら」

「大丈夫、美味しいよ。私の好みの味だよ」

「良かつた！ 気に入つてくれたのね」

「勿論だよ。君も飲んだら？」

未来が顔を左右に振る。

「私はコーヒーは飲まないのよ」

「おや、 そうだったかい。じゃあ、何を？」

「紅茶だわ。でも、今は喉が渴いてないから

「・・・ そうかい・・・」

浩二の体がかすかに揺れ出していた。

「どうしたの？」

「いや、何でかな。眠くなつてきて・・・」

「変ね、どうしたのかしら」

「ああ・・・ 疲れが溜まつて いる・・・ からかな・・・ きつとリラ

ツクス・・・して・・・

カップが傾き出したのを未来が受け取る。

「少し寝るといいわ」

「・・・」

微かに口が動くが声が出て来ない。

携帯が鳴った。

『どう?』

『寝ちゃつたよ』

『爆睡?』

未来が浩二の頬を抓る。

『うん、爆睡してるみたい』

『そっちへ行くわ』

未来が車から下りると、遠くに若菜の姿が映った。
近付いてくる若菜は薄っすらと微笑んでいた。

車から少し離れた所で若菜の歩みが止まった。

その姿は、海風に髪を躍らせ、じっと車を見つめてただ立ち向かっている。

相変わらず、頬には薄っすらと笑みが浮かんでいるのだ。
周囲に人の気配は無く、波の音が聞こえて来るだけだ。

未来は若菜に近寄ると、話の口火を切った。

「あいつ、「一ヒー飲んでる途中で眠くなつたって言つてたわよ」

「そうでしょうね」

「何で?」

「体质・・・かしら」

「下剤の効果が無かつたんだけど

「睡眠効果はあつたんじゃない?」

「本当に下剤だったの?」

若菜の目が冷ややかに未来を捕らえた。
そして又車へと視線を戻す。

「・・・象でも爆睡するわよ」

「やっぱり！睡眠薬ね！」

「さうね」

「どうして？」

「・・・暫く寝ていて欲しかったのよ」

「暫くって」

「録音したんでしょう？」

「したわよ」

「聞きましたよ」

「でも・・・最初から、詐欺行為を暴露できる様な言動は無かつたわよ

若菜が踵を返し歩き出した。

「待つてよーどこへ行くの？」

「私の車よ

「だつて、このままじゃ・・・」

「言つたでしょ、象でも寝るって。3時間や4時間は爆睡してるわ

一人は車へゅっくりと近付いて行つた。

「私ね、本当の事言うと未だに信じられないのよ。本当は、未来の早とちりなんじゃないかって

「若菜・・・」

「でもさ、確かに変だなって思う様な事もたくさんあるのね」

「・・・」

「現に彼は、実家に行つてる筈なのに、じつして未来とトーントしているしね

「だからー」

「そうよ。これが現実で、彼は私を騙していたのよね

若菜が寂しそうに笑う。

しかし、その笑いは引きつつて見えた。

車の中に入ると若菜が手を差し出した。

「何？」

「信じられないから」
「聞いたら余計にショックで眠れなくなるわよ」

「とっくに眠れないから」

「・・・聞かせたくないんだけどな」

「見当は付いてるわ。どんな会話が繰り広げられていたか」
未来がバックから録音機を取り出し、再生ボタンを押した。
すると、楽しそうな浩一の声が聞こえて来た。

浩一と未来の一人の会話だ。

「言つとくけど、本心でこんな会話を楽しんでた訳じゃないからね」
未来は、心のどこかで浩一との心地好い時間を楽しんでいた自分
を恥じるかの様に、未来に向けて口を尖らせて見せた。

若菜はそんな未来を横目で見ながら、笑うでもなく頷いて見せた。
分かっているのだ。

浩一との会話がどれほど女心を和ませ、楽しませてくれるのかを。

浩一に掛かれば、どんな女でも心を奪われるだろう。

録音機から流れる楽しそうな一人の会話を聞けば、想像するまで
も無くその場の雰囲気が分からうというものだ。

若菜は心に針が刺さるのを感じていた。

第一一十七話 パーレーの味（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。
面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお
願いします

ハルケ（前書き）

たくさんの方にお読みいただき、感謝に堪えません。
ありがたくも、最終話を迎えることができました。
心から感謝いたします。ありがとうございました。

HΠローグ

録音を聞き終わる頃には、薄つすらと手に冷たい汗が滲んでいた。

嫉妬。

怒り。

憎しみ。

どこかで裏切られると分かつていた。
分かつていながら、信じたかった。

一度とあの日と同じ別れを味わいたくないと思っていたのかもしれない。

若菜は録音機の停止ボタンを押すと未来へ返し、ゆっくりと顔を上げた。

そのままは、はつきりとした決意をみなぎらせていた。

ぞつとする様な眼差しに出会った未来は、若菜の手を掴んだ。

「何をする気?」

「別に・・・あの人にはぴったりのショチエーシヨンを用意するだけ
証拠を集めて警察に突き出すんでしょ」

若菜が未来の手をほどく。

「そうね・・・やうじようと思つていたけど、それは彼にはふさわしくないわ

「どういう事?」

「だって、警察に捕まるなんて・・・華麗な詐欺士が惨め過ぎるじゃない

「・・・」

若菜は車から下りると、後部座席から大きな紙袋を取り出し歩き出した。

風が若菜を襲うが、髪が狂うように踊るだけで若菜の行く手を阻む事は出来ない。

一步一歩を踏みしめる様に、進んで行くのだ。

未来も車から下りると、若菜の後について歩いた。これから何が起るのか、それを想像する事すら恐ろしく感じる。若菜が抱える大きな紙袋に一体何が入っているのか、問う事すら恐ろしい。

それでいながら、これから起る事が予測できている。その予測が、事実でなければ良いと念じずにはいられない。が、止める事も出来ない。

若菜の体全体から出る、得体の知れない怒りのせいなのか。それとも・・・。

車に到着すると、紙袋から手袋を取り出し、はめる。

(やつぱり・・・やつぱり殺す気なんだ!)

若菜の様子をじっと見つめながら、未来は自分の体が硬直して動けないのを感じていた。

(今止めなくちゃ、止めさせなくちゃ、若菜が殺人犯になっちゃう!)

しかし、声が出ない。

若菜の手に白い手袋がはめられ、ゆっくりと車のドアを開ける。紙袋から練炭と火鉢を取り出すと火を点け、車内へ置いた。

そして、ゆっくりとドアを閉める。たつたそれだけの事だった。

しばらくすると車内に白い煙が立ち込め出した。それを確認する様にじっと見つめ続ける。

手袋を外しながら、未来を振り返る。

「未来」

呼ばれて、はつと我に返つたがまだ動く事が出来ずにはいると、若菜が未来の肩を叩いた。

「茫然自失つて感じね」

可笑しそうに未来に笑顔を向ける。

未来は大きく深呼吸すると、やつと声が出る様になつた。

「若菜・・・これ

「うん」

「殺人だよ」

若菜は大きく頭を振ると、はつきりと言つた。

「いいえ、ジ・サ・ツよー」

「だつて・・・」

「車の中を見て御覧なさい。ちゃんと遺書があるから」

「遺書つて・・・」

「パソコンで打つたのよ」

「じゃあ、最初から？」

「違うわ・・・これは、賭け」

「賭け？」

「そうよ、浩一と未来の会話を聞いて、私の気持ちがどうなるか・・・そこに掛けたのよ」

「どういうこと？」

「私は彼を愛してる。それゆえに、許せるか・・・許せないか」「許せなかつたのね」

「・・・反対よ。許せた」

「それなら殺さなくとも」

「さつきも言つたけど、彼ほどの人が警察に捕まるのは可哀想なの

よ

「・・・」

「私が突き出さなくとも、いつか誰かが彼の罪を暴くわ。その時彼は獄中の人になる。そんな、哀れな姿は彼には似合わないの」

「でも！でも、殺したら若菜が犯罪者になるじゃない！今なら間に

合つわ、今なら助けられるよ

「助けるつもりはないのよ。未来も手伝つての以上は、同罪よ」

「えつ！」

若菜の冷ややかな、それでいて悪戯つ子の様な眼差し。

それは、『未来が警察に言えば、未来自身も捕まるんだよ。だから・ら・同・罪なんだよ』と言つている様に見えた。

確かにそうだ。浩一を殺人現場に導いたのは、誰でもない自分自身なのだから。

何をどう言つた所で、その事実は変わり様が無いのだ。

「だから、一人だけの秘密。これでこの殺人劇が明るみに出る事は無いでしょ」

「そんな・・・」

「大丈夫よ。彼は、自殺なんだから。ちゃんと遺書にそう書いてあるわ」

「・・・練炭自殺なら、車にメ張りをすると言つひぢやない。その辺から、怪しまれて分かる事だよ」

「別に、100人自殺して100人がメ張りする訳ぢやないでしょ。」

「

若菜が可笑しそうに笑う。

信じられないという田で未来が若菜を見つめているが、それすらも可笑しい様だ。

「だけど・・・死んじやつたら、お金は戻つて来ないよ」

「・・・」

「生きていればー警察に捕まればー少しほ戻つてくるかもしけない

「・・・いいのよ。あんな端金」

「端金つて・・・だつて、一生懸命貯めたお金じやない！」

「いいのよ」

若菜の目が自信に満ちた笑いを浮かべるのが分かつた。

「何で？何で、そんなに・・・」

「だつて・・・保険に入っているんだもの」

「保険つて・・・

「8000万の保障よ。自殺だから、満額は出ないけどね」

あれは、浩一と出会って、浩一がプロポーズしてくれた日だった。若菜が新規が取れない何度もぼやいていた時だ。

結婚するなら、保険に入つて欲しいと提案した。

浩一は掛け金が払えないと渋つたが、結婚するのだから若菜が支払うという事で了解したのだった。

後は若菜が全ての手続きを行い、浩一はサインするだけだった。

浩一からしてみれば、結婚する気など無いのだから、保険に入ろうなどどうしようとも良い事だったのだ。若菜が掛け金を払うと言つのなら好きにすれば良いという簡単な気持ちだったのだろう。

一方、若菜にしてみれば、保険に入れれば会社への面子も立つ、それ以上に浩一に何があつても経済的には安心を得る事が出来るのだ。しかし、婚約者を新規の客にしたとあっては、さすがに古株のプライドが傷つく。

そこで、未だ新規が取れないという事にして欲しいと支店長に相談したのだ。

支店長からしてみれば、誰が新規で契約しようと関係ない事だが、担当者本人が公表しないで欲しいと言つのだから、別段取り立てて言つ程の事でもないと了承してくれたのだった。

「じゃあ・・・」

未来が若菜の話を聞き終えると擦れる声で言つた。

「あれほどの金額が騙し取られても、最後は・・・こうなれば、多額の保険金を手に出来るから、惜しくは無かつたという事だったのね」

「そんな事無いわ」

そんな事は無いと口では言つているが、確かに浩一が死んでくれれば、多額の保険金が入ると思つていなかつたといえば嘘になるだ

るつ。

それも、半端な額ではないのだ。

浩一が詐欺士だと聞いてから、何度いつそ死んでくれたらと思つた事か知れない。

その度に、恐ろしい事を考える自分に嫌悪を感じて来たのだ。

しかし、人間など所詮はそんなものかもしれない。

いつかは、こうなるだろうと分かつていたからこそ、睡眠薬も手に入れたのだ。

若菜は煙で中が見えない車をじっと見つめていた。

車中が白くなるに従つて、若菜の脳裏に浮かぶ保険手続きの書類。手続きが完了すれば、間もなく受取人である若菜の口座へ、高額の保険金が振り込まれるだらう。

それから自分はどうするだらうか。

若い後輩達の白い目に晒されながら、今の仕事を続けていくのか。それとも、小さな店でも出してみようか。

そんな楽しそうな若菜の顔を、悔しさの募つた未来の眼がじっと凝視していた。

その眼は憎しみと嫉みと・・・殺意を含んでいた。

風がうなりを上げて二人の間を通過して行つた。

Hプローグ（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。

いかがでしたでしょうか？

あなた様の思ったとおりの展開でしたか・・・？

では、又次回作でお目にかかりたいと思います。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^_^ ）【ポチッ】とお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5122m/>

ひとひらの夢

2011年3月5日15時55分発行